

教職大学院 Newsletter

No. 174

福井大学大学院 福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科 since2008.4 2023.08.23(公開版)

大学院時代の想い

福井大学教育学部附属特別支援学校 校長
福井大学連合教職大学院 教授
岩井 秀夫

この4月から附属特別支援学校の校長となり、あわせて教職大学院で院生の皆さんとともに学ぶことになった岩井です。大学のキャンパスで学ぶのは、30年ぶりです。私は教員として附属特別支援学校(当時は養護学校)に勤務していた頃、平成4年度から5年度にかけて、宮城教育大学大学院に内地留学をさせていただきました。当時は、グループホームなど障害者福祉の新しい流れが注目され始めており、研究心や好奇心がまだ旺盛だった私は、ヴォルヘンスベルガーの「ノーマリゼーション」を翻訳して日本に紹介した宮城教育大学の清水貞夫先生の下で勉強したいと、仙台での大学院生活を始めました。

その頃から附属特別支援学校は、既存の学校教育とは異なる実践を行っていました。校舎の前に丸太小屋を建てたり、その小屋にススキで屋根を葺いたり…。先生方も独特の教育観を持っていた。元々私は、教員養成系の大学出身ではなかったのですが、そのような環境で教員生活を始めて、すっかり附属特別支援学校の「生活教育」にはまっていたように思います。ただ、直観的に間違いないとは思っていたものの、この生活教育について自分なりに確信を得たいとの思いが大学院で勉強しようという動機につながったのだと思います。

この2年間で、「精神遅滞児の後期中等教育につ

いての一考察」(ちょっと芸のないタイトルですね)という修士論文を書きましたが、その最後のまとめにはこのような文を記しています。「教科教育か生活教育かということについては、さらに考察を必要とする」と考える。」つまり、大学院進学の原因になった生活教育について自分なりの確信は得られなかったということなのでしょう。ただ、このことにはまだ続きがあります。実は2年間でもう一つ並行してかなり熱を入れて取り組んだことがありました。それが選択科目で受けた哲学演習でした。80年代のニューアカの影響を受けていたのかも知れませんが、大学院では現代哲学も勉強したいと思っていて、哲学を担当する太田直道先生からドイツ観念論と現代哲学が交差する社会哲学者のユルゲンハーバーマスをお勧めいただいて、その主著である「認識と関心」を1年間かけて読み込むことになりました。その後、太田先生と一緒にゼミに付き合っていたいただいた幼児教育の本屋先生から、「せっかくここまでやってきたんだ

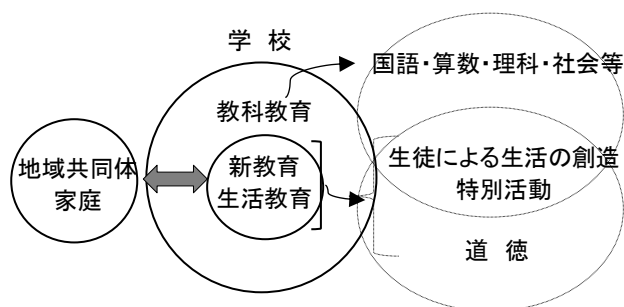
内容

巻頭言	(1)
院生自己紹介	(3)
インターンシップ/週間カンファレンス報告	(18)
ミドルリーダー/マネジメントコースだより	(21)
月間カンファレンス/ラウンドテーブルだより	(27)
ラウンドテーブル報告/感想	(31)
事務連絡	(48)

から、この哲学の学習をなんとか障害児教育と結び付けて論文を書いてみたら」と勧められ、調子に乗って書いてしまったのが、「生活世界としての学校」(タイトルだけだとこっちの方がカッコいいですね)です。中身はというと、ハーバーマスのコミュニケーション論を自分なりに解釈して、梅根悟氏の「世界教育史」等を引用しつつ、学校とはいかなる場所なのかを考察したものでした。とても論文とは言えないような代物ですが、自分なりの考えを整理してみたものです。

「ハーバーマスの生活世界は、コミュニケーションという相互行為の資源という意味があった。このことは、「真理が自然の中に存在し、それを探求するというモデル」から、「行為者が相互行為によって真理を組み立てるというモデル」への転換と考える。たとえ、学校が文化を伝達するというスタイルをとったとしても、教授する側の一方的なものの押し付けであってはならないことになる。少なくとも一方的な教授に終始するべきでない。」

私は「生活世界としての学校」の最終考察の中で、知的障害のある子どもたちの教科教育をめぐって、このようなことを書いています。さらに、教科教育の学校教育における位置づけについて以下のような図を示しました。



言ってみればこれらの図や文言が、生活教育についての疑問から始まった大学院での学びの一つの着地点ではなかったかと思っています。

さて、現在、私は教職大学院で現職の先生方やストレートマスターの皆さんの学校現場でのお話をお聞きしながら、また、実践研究報告や新しい教育理論などを読み解きながら、対話を通して自分の学びを深めています。私自身の経験から、学校生活から離れて様々な人や本と出会うこと、様々な視点から自分の教育実践を振り返り思索することが、きっと院生の皆さんの宝になるのだらうと思います。

追伸 先日、集中講座 Cycle 1 2023 Summer の要項を読んでいたら、「重要な文献」の中にハーバーマスの「認識と関心」「コミュニケーション的行為の理論」を見つけました。30年前の読み解きもまんざら無駄ではなかったのかなと、ひそかににんまりしているところです。



院生自己紹介

新しい院生の自己紹介を掲載しています。今回は4回目、学校改革マネジメントコースの14名です。

学校改革マネジメントコース1年/法政大学中学高等学校 石川 秀和(いしかわ ひでかず)

自己紹介代わりに画像を入れさせていただきました。この画像は戦後70年の年に自転車ピースリレーと称して広島の花巻から東京、そして東京から名古屋まで高校生と共に自転車でめぐった際の写真です。福島県に入ったあたりで撮影したものです。東北の地域を巡った際には、各地で震災の時のお話を伺いました。当時は、今よりも福島県内の国道6号線の通行規制が厳しかったため、一部区間は車で移動となりました。線量計がかなり大きな音を立ててブザーが鳴っていました。また、常磐線も開通しておらず、駅の周りに大量のフレコンバックが置かれていたのを今でもよく覚えています。2012年から震災後10年となる2021年まで毎年高校生や中学生の有志のメンバーを連れて南三陸にボランティアに入っていました。当初は、がれきの撤去からはじまり、その後は地域のお祭りの手伝いなどを行い、現地の方々との交流を通じて様々なことを学ばせていただきました。

社会科の教員ということもあり、勤務校では広島・長崎の平和学習旅行や沖縄の修学旅行を担当することが多くありました。震災の学習や平和学習などフィールドワークの実践交流もさせていただければ幸いです。

●福井大学での学びとの出会いと自分の思い

福井大学で学ばせていただくことになったきっかけは、私学の会合で東京サテライトの案内を目にしたことです。「働きながら学べる」「世代をつなぎ、学校の実践と研究を更新する」「板橋区」などの文言が自分の目に飛び込んできました。いわゆる「ちょーく&とーく」の授業に限界を感じていた自分、様々な特性をもった生徒一人ひとりにとってより分かりや

すい授業を展開するにはどうしたらよいのかということから特別支援について学びはじめた自分、若手の先生方と学び合い教育活動を旺盛に展開していく職場を創造するにはどのようにしていったらよいのか迷っていた自分がいて、東京サテライトの案内を見たときに強く興味を惹かれました。また、何より板橋区在住の自分にとって東京サテライトが板橋区教育委員会と深い関わりがあることには、区民としてご縁を感じるところでした。地の利を活かし「働きながら学べる」という点を実践していきたいと考えています。

●福井大学で学び、実践していきたいこと

教職員・生徒・保護者のウェルビーイングを高め、生徒の主体的な学びを実現し、若手の先生方の働きがいを高めていくには、どのような方策が必要なのかを探究していきたいと考えています。多忙感などもあり、学び合いが少ない勤務校においても、授業をお互いがひらき、実践交流しながら学び合う流れを生み出していくことについて、深めていきたいと思っています。これまでのカンファレンスを通して、すでに貴重な学びの機会との出会いを実感しています。福井のカンファレンスでお会いしたストレートマスターの方との対話からもその世代の方ならではの考え方を伺い「若手の先生方と学び合う」という自分のこだわりポイントにストレートに関わる学びの経験をさせていただいているところが特にありがたいです。この恵まれた環境を自分自身でも十分活かしていきたいと決意しているところです。

●生まれて初めて福井の地に足を踏み入れて

私は、福井大学で学ぶことになるまで、一度も福井県を訪問したことがありませんでした。これを機

に福井の様々なものと出会い、堪能し、人生の潤いを
得ていきたいと考えています。機会と時間を捻り出
して（これが一番難しいかも知れませんが）、福井で
サイクリングをしてみたいとのささやかな望みも持

っています。福井ビギナーの私ですが、様々教えてや
っていただければ幸いです。

先生方、そして共に学び合う院生の皆様方、どう
ぞよろしくお願いいたします。

学校改革マネジメントコース1年/岐阜市立加納中学校 **今井 良昌** (いまい よしまさ)

今年度より学校改革マネジメントコースで学ぶこ
とになりました、今井良昌と申します。よろしくお願
いします。

教師として22年目を迎えた今年、このように自
分を見つめ直しながら学べる貴重な機会を得ること
ができました。県をこえてさまざまな立場や年齢の
方々との対話を通して、良い刺激をもらっています。
これからの2年間の学びを、これから大いに生か
していきたいと思います。

私が教師になったのはなぜかと振り返ってみると、
「学校っていいな」という思いをもつことができた
からです。小学校の時に、学びによって自分の世界の
広がりを感じさせてもらったこと。児童会の活動な
ど仲間とのかかわりあいによる活動を通して、自分
のよさを見つけることができたこと。中学校では、生
徒会活動と部活動で自治をかじったこと。高校では
学ぶ場をつくる教師の力に魅力を感じたことなど、
学校という学び場で、上記のように他者との関係の
中で、自分が成長したことを実感するなど、いい思い
をさせてもらったことが原風景となっているように
今となっては思います。

大学進学にあたっては、心理学と社会学、教育学
などを広く学び、人間とは何かを研究する学部へ進
学しました。当時は、人間とは何かという、どちらか
といえば、文化人類学的な分野の問いをもっていま
した。それに関連する形で、多文化教育を扱う研究室
に所属しました。そこで生涯学習的な視点や世界の
教育事情を学ぶことを通して、日本の教育制度を学
ぼうと思い、大学院では教育制度学を学ぶ研究室へ
進学したのです。

大学院では「開かれた学校づくり」として、学校と
保護者の情報コミュニケーションについての研究を
行いました。具体的には、学校ガイドブックの作成を
通じて、保護者と教師が学校を再発見するプロセス
を明らかにし、学校参画の一つの有効な方法である
ことを提案した研究です。「事件は研究室ではない、
学校で起きている」という指導教官の研究スタイル
に感化され、地元岐阜県の教員採用試験を受験し、そ
こから中学校教員としてのあゆみがスタートしまし
た。

初任の山岡町立山岡中学校（現恵那市立山岡中学
校）では、5年間勤務することになりました。そこで
教師とはどうあるべきか、初任者指導の先生から学
び、生徒と同僚と、そして地域とともに教育活動を行
うことを経験させてもらいました。この5年間で、1
年生担任から3年生までもちあがり、特活や道德、人
権主任などとして、学校全体のことを企画する経験
もさせていただきました。

次の本巣市立糸貫中学校では、3年間勤務しまし
た。生徒会・特活主任としての経験を積むとともに、
学校外でも中学校から大学まで続けていたバレーボ
ールの経験を生かし、国体の強化指定選手の指導も
経験させてもらいました。

その後は出身の岐阜市に戻り、岐阜市立岐阜西中
学校では7年間の勤務となりました。ミドルリーダ
ーとしての自覚を高める7年間でした。中体連でも
県の専門委員長を務めるなどの経験もしました。

そして現在の岐阜市立加納中学校では、7年目の
勤務となりました。担任、学年主任、生徒指導主事、
教務主任と、多岐にわたる校務分掌を経験し、学校を

どう回していくのかをさらに体感することができました。特に、学校をあれさせないために、問題行動などのトラブルの未然防止及び生徒の心理的安心感を育むための包括的な生徒指導についてなど、危機管理意識の大切さについて学ぶことができました。コロナ禍において、今まで経験したことのない状況に置かれる中、どうやって生徒の学びを担保すればよいかと、職員間で知恵を凝らし、工夫して乗り切ったことも、いい経験になりました。教員間での対話の大切さを実感しました。

今年度は、研究推進委員長として、これまでの授業の概念を超えていくことを目指して研究に取り組んでいます。昨年までの3年間で、「学びをつなぐ生徒の育成」についての研究が一段落し、今年度からは、「主体性の育成」に重点を置きながら、これからの授

業のあり方を変えていきたいと考えています。福井の探究学習からは大いに学んでいきたいです。

生徒が主体的に学んでいくには、まず教師が主体的に学んでいくこと。教師の学びが生徒の学びに通じるという言葉が、カンファレンスやラウンドテーブルを通して胸に突き刺さってきました。ラウンドテーブルで出会った福井の中学生や高校生の姿が、それを証明していたとつくづく感じました。大学院で学ぶことで感じている自分のわくわく感が勤務校の職員に伝えることができるような、職員間の学びへとつながるように実践を積み重ねていきたいです。福井のよいところ、岐阜のよいところ、うまく合わせながら、実践を積み重ねていきたいです。どうぞよろしくお願いします。

学校改革マネジメントコース1年/千葉県袖ケ浦市立長浦小学校 犬塚 晶子 (いぬづか しょうこ)

本年度、学校改革マネジメントコースに入学しました千葉県袖ケ浦市立長浦小学校の犬塚晶子です。千葉県袖ケ浦市は、アクアラインで有名な木更津市のとなりの市です。京葉工業地帯と東京湾の海岸線があり漁業が盛んで、内陸部は、農業が盛んな地域です。また、都内からも車で1時間前後と交通のアクセスも良いため、最近ではメディアで紹介されることが多くなりました。

私は千葉県館山市出身です。高校卒業まで、館山市で過ごし、都内で学生生活を送り地元館山市、南房総市、鴨川市の中学校・高等学校で家庭科の講師の後、木更津市の小学校で新規採用となり現在まで小学校教諭として勤務してきました。専門は、家庭科です。小学校家庭科は、5・6年生のみ教科ということもあり5年生5回、6年生10回といったように高学年の担任・学年主任をすることがほとんどでした。平成21年度に千葉県長期研修生として千葉県立衛生短期大学（現・千葉県立保健医療大学）で1年間、食育について研究をしました。教職に就いてから、家庭科を自分の専門教科とし様々な研究大会で実践発表をした

り、授業公開をしたりしながら教員生活を送っていました。子どもや保護者・地域、同僚・先輩の先生方と信頼関係を築き、やりがいやこの仕事の楽しさを感じ毎日全力で勤務していました。大変なこともありましたが、毎日が、楽しくて仕方がない教職について良かったと実感していました。

その後は、教務主任・総務主任をし、現在は、長浦小学校で、5年生の担任と学年主任をしています。新規採用・若年層の2人の若手の先生と一緒に、多忙ながらも楽しく勤務しています。

私の教員生活の大きな転機となったのは、教務主任となったことです。自分の学級や学年のことだけを考えた教育活動ではなく、学校・保護者・地域・行政・関係機関との関わりを考え、教育活動を行うことにやりがいと難しさを感じました。自分のことだけではなく学校経営の視点から若年層の教職員にどのように接するべきか、地域や保護者の願いをどのように実現していくか、国・県・市の指導行政からの通達や指導をどのように勤務校で行っていくか、教育課程や児童にとっての安心・安全な学校のために必

要なことは何か考え、校長先生や教頭先生からご指導をいただき対応にあたる、書類を作成する、毎日必死でした。やりがいは感じるものの、良い結果が出ずに悩むこともありました。新規採用の先生を担当することになり、今までの自分の経験や知識を伝え、1人目はお互いの信頼関係も築きやりがいを感じていました。しかし、担当した2人目の新採の先生の学級がうまくいかなくなり、若手教職員の対応に難しさを感じ自分には教務主任が向いていないのではないかと悩みながら、仕事を続け自分を責める毎日でした。学校現場は、児童生徒の学力向上、安全安心な学校、いじめ・不登校対策、教師の指導力向上、不祥事根絶、働き方改革、感染症対策、GIGAスクールなど教育課題が山積みです。このままではいけないと思うだけで、心身ともに疲れ果てていました。その後、学習会や指導行政が主催する研修会に参加し、自分なりに答えを見つけ少しずつですが状況が変化してきました。でも、まだ何かがたりない、自分のできることは何だろうと考える日々でした。

そんな時、東京サテライトの福島昌子先生から「大学院で学んでみませんか」と、お声がけいただきました。正直、うれしさと不安な気持ちが入り交じり複雑な気持ちでした。東京サテライトのラウンドテーブルに参加した時、宮古で教頭先生をされていて大学院を修了されたという方が「大学院は楽しいよ。ここに来ると元気になるよ」と、話しかけてくださいました。毎日必死で勤務していた私は、なぜかとても温

かい気持ちになりました。自宅に帰り、夫に大学院のことを話すと、「こんなに素晴らしいチャンスはないのだから受験した方が良い」と、言ってくれました。身近な人に応援してもらえる幸せを感じました。思ってもみなかった福島先生のお声がけ、院生の方のアドバイス、夫の応援で受験を決意しました。今までの経験則だけではなく、理論的な部分を学び、目の前の子ども・若手の先生方・保護者・地域のために学びたい、学び直したいと思いました。この思いが叶い、今学ぶことの楽しさを実感しています。まだ学びは始まったばかりでわからないことだらけですが、コミュニティ・オブ・プラクティスの考え方や、福井大学大学院が私の学校のエージェンシーになってくださり、困ったことの解決の糸口を与えてくれると感じています。

5月に千葉県南部で地震がありました。そのことがカンファレンスの時に話題になりました。福島先生が「私、地震の時、犬塚さん大丈夫かなって思ったよ。だって、教え子だもの」と話してくださいました。何十年かぶりに、「教え子」と言っていたさうれしくなりました。福井大学教職大学院に入って良かったと実感しています。福井の先生方は、血の通ったあたたかみのあるご指導をしてくださる先生ばかりです。福井でたくさん学び、子どもの姿で教育の成果を語れるように精一杯努力する所存です。今後とも、よろしく願いいたします。

学校改革マネジメントコース1年/玉ノ江こども園 萩原 慶子(おぎはら けいこ)

今年度より福井大学連合教職大学院の学校改革マネジメントコースに入学しました萩原慶子と申します。福井市のショッピングセンターベルの近くの玉ノ江こども園に勤務しています。

教職大学院へ入学したらどのようなことがあるのかも何も知らずに、目の前の子ども達にとって今どのような保育が必要なのだろうか？ その子ども達と共に生活をする保育者にとってもどのようにして

いけば楽しい保育となるのだろうか？ その問いに対して、何か答えを教えていただけるのではないかと、という思いで入学したというのが本当の所です。しかし、入学式時に「教職大学院の場では、院の先生方から何かを教えてもらうという場ではなく、話し合いの中からお互いが学び合う場である」とお聞きして、私にやっていけるのだろうかとの不安が出てきたのも事実です。

現在、教職大学院に入学して3か月が経とうとしています。ストレートの大学院生の方や、高校、中学校、小学校、行政、そしてこども園の方々との話し合いの場で、様々な立場からのお話を聞かせて頂いたり、また私自身の話も聞いていただいたりする中で、充実した時間をいただいているなと感じています。このような時間を自園の中でも出来ないだろうか。これも私にとっての課題でもあるのです。

私の保育者としての振り返りの中で、重要な位置を占めるのが、ハンディをもった子ども達です。1年目に担任したY子ちゃん、8年目でのK君、11年目でのT君、27年目でのR君、彼らを担任させてもらっていた時は、毎日が今日はこれでよかったのだろうかと自問自答の日々でした。実は、今でもあれでよかったのだろうかと思っています。その時は毎日が必死で、一緒に担任している先生とどうしたらいいのかと「ああでもないこうでもない」と話し合ったなと思い起します。今にして思うと、彼らが「保育者としてそれでいいのか」と導いてくれていたようにも思います。特に重度の自閉症だったT君の時には、もうどうしたらいいのか分からず、その時にいつも電話をして相談をすると児童相談所のS先生が（当時はまだ特別支援教育センターはありませんでした）優しく一緒に考えてくださいました。その時の言葉が、「とにかくやってみましょう。そのやり方が合わなかったら、それは彼にとって合わないということが分かったのだから無駄ではないですよ。また、次を

考えましょう」でした。寄り添ってくださる安心感、S先生がいてくださったからこそ、T君に前向きに接することが出来たのだと思います。

そして、もう一人「主任保育士特別講座」でゼミの先生であったK先生です。K先生は出来の悪かった私を心配してくださっているのでしょうか。講座が終わりゼミの担当を終えてからも、今保育で考えなければいけない事などを常に伝えてくださっています。K先生から学び続けることを教えて頂いています。実は、「大学院に行くといいよ」と背中を押してくださったのもK先生です。

今年、大学院に入学して「子ども達が真に主体的に生活する」「保育者が主体的に保育する」この二つの深い課題、それをいかにして実現できるようにしていくのか。私には荷が重すぎる課題です。しかし、院の先生方が「そのために私たちがいるのですよ」と言ってくださいました。また、教職大学院を修了されている先輩方が、話を聞いてくださり保育を見においでとも言ってくださいます。今年一緒に入学した、こども園の先生とも保育について話し合うことが出来て、入学していなかったらこのような心強い思いが出来なかったと思います。

レポートは、グタグタになって期限ぎりぎりに提出している私ですが、これからの教職大学院の学びをドキドキしながらも深めていけたらと思っています。よろしくお願いいたします。

学校改革マネジメントコース1年/座間市立相模野小学校 川田 奈津子(かわだ なつこ)

今年度から学校改革マネジメントコースで学ばせていただく川田奈津子です。現在は神奈川県座間市立相模野小学校に勤務しています。教員になって7校目の学校になります。民間企業で10年ほど勤務し、公立学校の教員となりました。非常勤や臨任をしながら県内の学校を巡り、一念発起し正規の道に進みました。正規職員になって14年になります。多様な経験が今につながり福井大学教職大学院で学ぶことができることを嬉しく思っています。

いい授業がしたい、教師なら誰でも思うことです。そのために多くの有名な先生の授業を参観したり、〇〇のやり方といった本を読み真似をしてみたりしてはうまくいかないことに落ち込んでいた時もありました。30年以上たちますがまだいい授業ができていない未熟者です。それでも年齢と経験を重ね、後進を育てる立場になった時、いつ、どこで、何をすることが子ども達とその子ども達を支える先生方の役に立てるのか考えるようになりました。

福井大学大学院との出会いは、牧田秀昭先生の実践記録『探究するコミュニティへのプロセス』(2005)を読んだことです。その頃、私は研究主任として算数を研究していました。牧田先生の生徒の授業での変容から少しずつ他の教師を巻きこんでいく校内研究の進め方が印象に残りました。20年以上前の実践になるのかもしれませんが立ち止まって教科の本質にもどることやカリキュラムを仲間と共に省察し作り上げていく過程は今でもつながる考え方があるのだと思いました。同じ頃、『授業研究』(木村優・岸野麻衣編 2019)を読んでいました。いい授業が一人の教師だけで作られるものではないことや授業を参観する時の視点、研究会のデザインについて自分の経験と重なって新たな気付きとなり感動したことを覚えています。それでもまだ福井大学の印象は強くはありませんでした。印象を強く持ったのはラウンドテーブルでした。ラウンドテーブルの参加は恩師の紹介でした。ラウンドテーブルが他の大学や学会、企業へと広がりを見せている中、同職種で時間をかけて行う福井大学のラウンドテーブルは私にとってとても新鮮でした。研究会の発表や協議会とは異なり語り手の不安や迷い、そこから得た自信が伝わってきました。聴き手として、自然に思い浮かぶ疑問を問いかけることで他の方の実践が自分の実践と重なり自分の学びにつながりました。この時には福井大学への印象はとても強くなったのですが、さすがに福井には行くことができないと思っていました。そんな時石井恭子先生のコラムに目が止まりました。そのコラムの中の「マニュアルや指南書を読み込んでも、名人の指導案をもらって試みてみても、同じ授業にはなりません。それは、授業が子どもとともに作り上げていくものだからでしょう」に強くひかれ、話を聞くことにしました。石井先生から東京サテライト

があることを教えていただいた時、見えない力に背中を押してもらったようでした。「人とのつながり」も大きいですが、私自身の「学びのつながり」が福井大学教職大学院への道につながっていたのだと思っています。

さて、学校ではコロナが落ち着き、少しずつ日常に戻ってきました。制限の中で行われていた、または行われていなかった教育活動を元の形に戻すことになった時「あれ！？どうだったかな」という状況になっていないでしょうか。今年度になり、私の勤務する学校で議論となったのは運動会でした。それまで、休止・分散・種目の削減、参観者の制限等状況にあわせて工夫してきました。数年とはいえ、職員の異動もあり、以前の運動会を知っている職員が少なくなっていることや運動会自体の経験知をもたない若い教員が増えたこと、逆に経験知が混乱し今の学校の運動会がどうだったか曖昧になってしまう教員もいて「問い直し」の空気が流れていました。「運動会の全校競技や PTA 種目も復活させるのか」「運動会の係活動は6年生だけでよいのか。5年生も活動をした方がよいのではないか」など、学校行事は学校全体が動く活動ですから自然にでてきます。それは行事だけでなく、それぞれの授業や校務の中で小さな「問い直し」が行われていることが日常の会話からわかります。そのような「問い」を大切にし、対話を通して問いの答えを探していきたいと考えています。この大学院での学びは自分がこれまで様々な角度から見てきた教育を整理し、意味づけし、交流を通して新たな学びを実践につなげることを目標に取り組んでいこうと思っています。多くの方との出会いを楽しみにしています。

学校改革マネジメントコース1年/石川県加賀市立錦城小学校 坂口 明美(さかぐち あけみ)

子供たちの笑顔が見たい。わからなかった問題が解けたとき、逆上がりなどできなかったことができるようになったとき、その瞬間に子供たちが浮かべる満面の笑みが、私は大好きです。その満面の笑みを

見るために教員をやってきたといっても過言ではありません。そしてもう一つ、子供たちの自己肯定感を高めたい。これも私の強烈的な願いです。

教師としてのスタートは中学校勤務でした。その学校には10年間勤務しましたが、かつては新規採用者が本校勤務であることが判明した後、教員を辞退するほどの生徒指導困難校。この学校でも子供たちの笑顔を見るために、部活動の指導に明け暮れました。この頃は、部活動が生徒指導の一貫であるという意識が強く、運動部、文化部を問わず、先生方が休日にも献身的に指導にあたり、多くの部活動で県大会や北信越大会出場を果たしていました。私が主顧問をしていた部活動も、創部2年目には県大会個人総合優勝、北信越大会個人総合優勝を果たし、全国大会に出場しました。創部3年目には、個人・団体とも県・北信越大会で優勝、全国大会に出場し、団体10位という結果を得ました。しかし、今にして思えば、熱血指導が子供たちの主体性を育む教育にはつながらず、反省点ばかりが思い出されます。

30代になり、小学校勤務となりました。日々様々な教科の授業を担当が行い、教材研究が重要となる小学校では、子供たちの学びを保障するため、書籍の実践を追試したり、休日に研修を受け、学んだことを授業実践につなげたりしました。うまくいくこともありましたが、うまくいかないことも多かったです。とにかく日々子供たちの笑顔を見たいという想いで、授業づくりに邁進しました。総合的な学習の時間が導入されたときには、教師の学びが子供の学びにつながるという楽しさを実感しました。3年を担当したときに自然豊かな地で「町のよさを伝えよう」をテーマに、子供たちとともに町探検で町のよさを発見し、最後は、産官学連携での取組として、子供たちが市バスに乗って、観光客にバスガイドとして町のよさを伝えました。その取組は大成功となり、子供たちとともに地元の名水「水上の水」で乾杯したことが、つい昨日のことのよう思い出されます。充実した日々を子供たちとともに送ることができました。

小学校勤務10年目を迎えた頃、現在の勤務校に勤務することになりました。本校は、県の算数の活用

力や食育・体育の公開研究授業発表校に指定され、いずれも授業者として授業づくりに奮闘する中で、日々研鑽を深めることができました。多忙ではありましたが、子供たちの笑顔をたくさん見られるようになり、充実した日々を過ごすことができました。

振り返ると目の前の子供たちの笑顔を見たいという想いで行動してきたことが、自身の成長につながっていることに気付きます。今年度より2度目の本校勤務となりました。管理職としての勤務は、教員の頃とは違う意味で責任も重いですが、子供たちの笑顔を見たいという想いで日々奮闘しているところは以前と同じです。また、4月から大学院で学ぶ機会も得ました。大学院では、校種・立場を超えての交流から、貴重な学びを得ることができます。どのような立場となっても、「子供たちの笑顔を見たい」が私の原動力です。

今年の1月から加賀市の学校教育目標が「Be the Player」～自ら考え 動く そして社会を変える～になりました。この目標の具現化に向け、4つの新たなプロジェクトを柱とし、市全体で大きな改革を進めています。目指すところは、主体性をもちウェルビーイングな社会づくりに貢献できる児童の育成。そのために、最も重要なのは何と言っても日々の授業実践。本校では、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を図る授業改善を通して、自律した学び手を育てることを目指し、研究主任を中心に学校研究を進めています。校長としては、子供たちが自律した学び手になることを目指した授業改善を通して、人材育成も図れるよう様々な取組を推進しているところです。これからも子供たちの笑顔のために、日々挑戦し続けていきたいです。

すべては子供たちのために、すべての子供たちのために。

学校改革マネジメントコース1年/同志社中学校 田畑 彰子(たばた あきこ)

今年度、学校改革マネジメントコースに入学しました田畑彰子です。京都に在る同志社中学校で数学教諭として勤務し、今年度は生徒支援部主任をしています。同志社中学校は、2010 年より教科センター方式による教育活動を展開しています。至民中学校に生徒たちと見学させていただきました。福井のラウンドテーブルには同僚の先生方も参加されていて、私も聞き手として一度参加させていただいたことがありました。本校の研修会等に教職大学院の先生方をお招きしたりもしていたので、大学院は身近な存在でしたが、自分が入学しようとは思っていませんでした。

世界的なパンデミックが学校教育に大きな影響を与え、「学校とは?」「教育とは?」色々と考えさせられました。オンライン授業が導入され、従来の対面だけではない新しい教育スタイルになって当たり前が当たり前じゃなくなったと感ずることがあります。今学ばないとこの変化についていけなくなるという危機感、今まで走ってきたけど、本当にこれで良いのか、自分のことを客観的に捉え直す必要があると感じ、入学を決意しました。

入学して3カ月が経ちました。開講式、月間カンファレンスを対面で参加しました。オンライン研修も多かったのですが、初対面の方々と話す不安や緊張でさ

えも楽しんでいきます。4月の自己紹介では、学校の教育目標にかなり影響を受けていて、またそれを自分自身が大事にしていることを改めて知ることができました。自分の考えを言語化し、整理化されていくのも気持ちがすっきりします。年齢も立場も違う方々とのグループディスカッションなので、様々な角度から捉えられるのも面白いです。それぞれ持っている課題を議論しながら、新たな学びを生み出すのはワクワクさせるものがあり、対話の大切さをひしひしと感じています。

子どもの学びと教師の学びは相似形。「主体的・対話的で深い学び」を支える教師集団になるために、学びあい、協働できるような働きかけができるよう努めたいと思います。

学校を離れることなく学ぶこともできるのも大きな魅力。実践と理論を往還させながら面白い半分、苦労半分です。学校でも、教職大学院でもたくさんの方々に助けていただき、感謝しております。ありがとうございます。

カンファレンスでの「毎日が実践」という言葉。強く響いています。毎日を大切に、学び続けていきます。どうぞよろしくお願いいたします。

学校改革マネジメントコース1年/横浜市立東汲沢小学校 丹羽 正昇(にわ まさのり)

はじめまして。今年度、学校改革マネジメントコースに入学した丹羽正昇と申します。現在、横浜市立東汲沢(ひがしぐみさわ)小学校で校長をしています。本校は、横浜市の南西部、お隣は武家の古都 鎌倉市、江の島で有名な藤沢市という市境のまち、戸塚区の中にあります。

教職員歴は、今年度で30年。そのうち10年間を横浜市教育委員会事務局で勤務しました。2020年に11年ぶりに学校現場に戻り、いま4年目を迎えてい

ます。久しぶりに戻れたと思ったら、なんと初めの2か月間は新型コロナウイルス感染症拡大防止のため臨時休業。2か月間、子どもの声の途絶えた学校での勤務が続きました。経験したことのないコロナ禍の中での勤務。教職員は、家庭学習の準備や各家庭へのポストインによる教材提供に汗を流しました。その姿は、誠実でありながらもどこか空虚な様子でした。どれだけ気持ちを込めたとしても、子どもとは実際には会えないという現実があったからかもしれませ

ん。きっと、子どもも同じ気持ちだったに違いありません。お互いに手応えがない状況だったのです。

そのときに、校長として味わったのが、己の無力さです。校長とは、何のために存在しているのか。子どもや教職員のために、本当に役に立っているのか。自分一人が機能していない感覚に襲われました。教育委員会にいたときには、学校や横浜市の子どものために思って、自分で言うのもおかしいのですが、たくさんの施策を打ち出し、全市の教育に寄与しているという自負のようなものがありました。いまにして思えば、大勘違い状態が慢性化していたということです。反面、学校に着任してきてからは、教職員に委ねっぱなしになっていました。自己有用感や自尊感情のようなものは、木っ端みじんでした。

しかし、臨時休業中のある日の職員室で、教職員の姿を見て思ったのです。委ねている状態、実は学級担任時代に、子どもに学びを委ねているのと同じではないのかということに。放任するのではなく、委ねる。己の無力さを知り、学校経営の方針は明確にしながらも、運営は教職員に委ねる。自分の経営の方向性をはっきりしたのです。教職員同士が対話を重ね、自分たちの納得解を自分たちで導き出す。その心地よさを教職員にも体験し、実感してほしい。そう考えました。

そこで、私が取り組んだのは、とにかく教職員を観察することでした。一人ひとりの特長や素養を把握する。もっている力を十分に発揮するにはどのような環境が必要なのかを見とる。その環境のもと、どのようなサポートがあればよいのかをイメージする。スーパーゴールを何にし、どこにどのように向かうのかを明らかにするなど。やることや考えることは山積みでした。校長室に籠っている時間はなく、時間があると教職員と話をしたり仕事ぶりを観察したりしました。そういったことを半年間続けているうちに、学校には子どもの元気な声が戻り、コロナ禍での生活がスタートしていました。私が出した経営方針

はたったの二つ。①学校教育目標実現のために、授業改善を中心に置くこと。②授業改善に資する校内組織を構築すること。①に関しては、子どもに学びを委ねるという方向性。②に関しては、授業改善に資するプロジェクト制校務分掌(以下、PJ)の在り方などを研究していくことにしました。

2021年からの三年間。①②の両方で習熟が進み、①に関しては、子どもに委ねる授業から「子ども自らがデザインする学びの在り方」の研究校として、国立教育政策研究所教育課程実践検証協力校の指定を受けるまでになり、②に関しては、教職員によるPJが市内のモデルケースとなりつつあります。

私の無力さから出発し、結局は教職員と子どもに委ねるという本校での取組。いまでは、学びや経営の本質の研究となって花開いているのではないかと考えています。これは、決して、私の自己満足だけがありません。本校の教職員の言葉を紹介します。

「授業を子どもと考えるのは苦しいが、本当に楽しいことでもある。それに気付かせてくれた子どもに感謝したい」(教職員歴7年)

「教職員集団として、いまが最高だと思う。自分たちで考え、話し合い、決めることが抜群のチームワークを生んでいる」(教職員歴13年)

「事務職員が学校運営の、特に授業改善の何に役立つのか、最初は疑問だった。しかし、PJで他の職員と話したり公開授業研究会に参加し意見を言ったりしているうちに、自分の意識が変わってきていることに気が付いた」(教職員歴20年)

校長の無力さは、教職員の自覚を促し、子ども自らが学びをデザインする力の育成を可能にすると思います。だからこそ、校長は、人のキャリアにとことん関心を持ち、人の育ちにとことん関わらなければならないとも考えます。

私の教職大学院での研究の源です。

学校改革マネジメントコース1年/葛飾区立常盤中学校 平岡 栄一(ひらおか えいいち)

今年度から学校改革マネジメントコースで学ばせていただいております平岡栄一と申します。2018年6月に「こち亀」の葛飾区立亀有(かめあり)中学校長にさせていただき、本年4月に「寅さん」や「柴又帝釈天」の葛飾区立常盤(ときわ)中学校長にさせていただきました。現在、再任用校長2年目となります。自分は、働く場所や所属する組織は全て、好きになってしまう傾向があり、そこで出会った人々と話すうちに、アイデアや工夫の方法が浮かんできて、協力体制ができ楽しいことが起こってきます。これは全く皆様のおかげでいつも感謝の気持ちでいっぱいです。

福井大学連合教職大学院については、2、3年前にリーフレットを見て、少し気になっていたところでした。自分は管理職となった2011年に必要とされる資質を身に付けようと放送大学大学院文化科学研究科に選科履修生として所属して、学科の科目に限らず興味を感じた科目を学びました。物の考え方や視点の取り方に影響を受けた科目として「美学・芸術学入門」青山昌文、「環境工学」岡田光正、「情報デザイン論」伏見清香・須永剛司、「海外の教育改革」坂野慎二、藤田晃之、「世界の芸術文化政策」笠原潔、西村清和、「都市環境デザイン論」仙田満、佐藤滋、「都市社会構造論」森岡清志、北川由紀彦、「音楽・情報・脳」仁科エミ、河合徳枝、「人的資源管理」原田順子、奥林康司、「教育行政と学校経営」小川正人、勝野正章、「地域の発展と産業」河合明宣、などがありました。その後、2020年4月から2022年3月まで同研究科人間発達科学プログラム専攻に所属して、修士論文「オーケストラ指揮者の仕事について一名演奏が成立する時、その演奏にはどのような現象が生じているのか」を書きました。この学びにより少しずつ視野が広がり、物事の関連についての興味が

高まってきました。そうしたところに区教委から本学についての情報提供があり、教員としてのまとめはまだしていなかったことから受験させていただきました。

本学の良さは何と言っても、仕事を休むことなく学ぶことができるところであり、学校づくりの実践や様々な工夫等を丁寧に記録し、毎月のカンファレンス等で多くの語りや傾聴を繰り返し、自らが目指しているものに気づき、また実践を重ねるという循環を共有していくというところにあります。

実は、入学前はこうした方法が、大学院として質の高い学びにつながるのか、とやや疑問に思っていました。しかし、4月から7月まで3回の合同カンファレンス、1回のラウンドテーブルを経験する中で、この独特な学びの方法はとても有効であると思い始めています。一人ひとりの院生はそれぞれ違う経験を重ね、様々な持ち味をもっています。その一人ひとりのかけがえのない良さをカンファレンスによって大きく伸ばすことができれば、多様性があり、「文武両道」(学問 スポーツ 芸術)を大きく推進する学校づくりに大きく近づいていきます。

これらのテーマにはあらゆる人々が主体的に関わり、楽しんで参加できるコミュニティづくりが必要だと考えています。誰かに何かをしてもらおうとするのではなく、自分ができることを自分の意志で気持ちよく行うという姿勢、組織を向上させようという熱意をもった活動につながればと思います。

皆様と大いに語り合い、気づき合い、お互いの素晴らしい実践を大きく広めていく、本学で学んで本当に良かった、様々な気づきがあった、そうした2年間の学びになりますように。次のカンファレンスも楽しみです。

学校改革マネジメントコース1年/彦根市立城東小学校 平中 理恵(ひらなか りえ)

今年度入学いたしました、平中理恵と申します。現在は、滋賀県彦根市にあります市立城東小学校で、教務主任と校内研究主任をしております。

本校は、文部科学省の「幼保小架け橋プログラム事業」の指定を受け、近隣の4園と連携しながら架け橋プログラムの開発を1年生で、幼児期の学びとのつながりを意識した生活・総合および特別活動の改善を全学年で(校内研究として)行っています。校内研究主任としてこれらの研究を推進する中で、どのように進めれば先生方にとっても子どもにとっても学びのある研究になるのか、そもそも教師が学ぶとはどういうことか、という疑問をもつようになりました。そのようなもやもやした思いを抱えていた時に出会ったのが、この福井大学教職大学院です。ここで学びたい、と強く思い、学びの仲間に入れていただきました。

さて、自己紹介ということで、少しお時間をください。私の強みは、なんといっても「人との出会い運」がある、ということです。小学校の担任の先生、中学・高校・大学それぞれの部活の仲間や先輩、そして、教員として働き出してから出会った多くの方…。振り返ると、ターニングポイントには必ずそこへ導いてくださった「人」がいてくださいました。十分な自己紹介にはならないかもしれませんが、たくさんの人に支え導かれて歩んできたここまでの教職人生を振り返ることで、自己紹介に代えたいと思います。

初任校は、彦根市の城南小学校です。4年間在籍しました。この間、5、6年生、1、2年生を担当し、卒業・入学を経験させていただきました。また、授業公開をする機会も多くいただき、特に算数科の授業での「わかった!」という子どもの瞳の輝きに感動した私は、算数科の授業づくりを学んでいきたい、とい

う思いをもちました。今も算数の授業をするのが大好きです。

2校目である彦根市立金城小学校には、8年間在籍しました。ここで中学年を担当したことで、6学年すべてを経験したことになります。学習のつながり、子どもの変化(発達の特徴)などを肌で感じ、学ぶことができました。特に、クラス替えはありましたが、3、4、5、6年と4年間続けて担任したときには、それまでの子どもの経験や知識を生かして授業をする大切さ、楽しさを感じることができました。そしてようやく、子どもの反応を生かしながら授業を創る楽しさを感じられるようにもなりました。

8年目の終わりが近づいたころです。そろそろ異動だろうけど、まだまだ担任として子どもの瞳が輝く授業を創っていきたい、と思っていたところへ、異動の話がきました。学校を離れ、教職員支援機構への長期研修派遣という話です。「まさか」の一言です。教職員支援機構では3年間、アクティブ・ラーニングを中心に、学習指導要領の改訂について学んできました。その後の3年間は、県教育委員会でのお仕事をいただきました。学校を離れたこの6年間の学びは、ここでは書ききれません。たくさんの、という言葉では足りないほどたくさんのことを学び、学校(現任校)に戻らせていただきました。

現任校の初めの1年は、1年生担任をさせていただきました。学校を離れて勉強させていただいたことを、実際に自分で実践することができる、そんな幸せな1年間でした。現在は、冒頭にも書いたように、教務主任／研究主任として、先生方の学びを創る立場です。校内の初任者研修も担当しています。先生方が自ら学ぶ学校、そして、子どもが自ら学ぶ学校を目指し、私も教職大学院で学び続けたいと思います。

学校改革マネジメントコース1年/沖縄市立宮里中学校 前 幸三(まえ こうぞう)

初めまして。今年度より福井大学連合教職大学院の学校改革マネジメントコースに入学した前 幸三と申します。現在は、沖縄市立宮里中学校に勤務しています。どうぞよろしくお願いいたします。

入学して3ヶ月「3つの種」「カンファレンス」「ラウンドテーブル」これらの言葉の意味も分からずただただ慣れるのに必死でした。福井大学へ行くこと板橋区役所に行くことも、最初は手探り状態です。学校での一日の業務を終え高速を飛ばし(制限速度内)、最終便に乗ります。帰りも同様、今でも羽田空港へ何線に乗れば良いかは、携帯が教えてくれます。慌ただしい通学です。とてもではないが生徒や先生方には見せられません。でも毎回思うことは、一番得ているのは私ではないかということです。毎回多くの学びや気づきがあります。全く異なる環境で校種、役職関係なく語り合えることは、大きな刺激ともなっています。

4月の開講式後の最初の話し合いで、大学院では答えを教えない、そのことは期待しない方がいい、と言われました。最後に、今日のようなカンファレンスを月に1回行うことがメインです、とのお話でした。果たしてどうなるのか凄く気になりながら特急サンダーバードに乗りました。今では、このカンファレンスの形式がこれからの学びと相通じるものではないかと考えるようになりました。

以前と比較して考えて、先生方の意見を聞いたり、指示を出したり、その意図や目的を考えるようにな

りました。以前も考えていない訳ではなく、「言語化」「相手意識」「目的意識」「見える化」を心がけるようになりました。また、カンファレンスを通してファシリテーターの重要性を感じました。「対話」において、ファシリテーターの視点を生徒や先生方に持たせることが大切であり、育成したいという新たな目標もできました。福島先生から最初にいただいたメールには、先生自身が最終便で学んでいたということやそれでも学ぶことの楽しさ、意義について。平良先生からは、励ましのお電話を何回も頂きました。清川先生には、先生方を育てる醍醐味を示唆して頂きました。先生方に支えられていることに感謝です。カンファレンス等の際、対話の進め方に慣れないもので話し合いに参加した先生方には失礼をしているかもしれません。お許してください。

私のモットーは、「向き不向きより ひたむき 前向き 前 幸三 です。」これまでも、荷が重いと思うことがありましたが、プラス思考で動くことで多くの失敗から学ぶことができました。今後とも自分自身の成長と先生方、生徒の成長を目指し頑張りたいと思います。

最後に、日常の業務をこなしながらの久しぶりの学生生活となります。学生時代同様締め切りに追われる生活となりそうですが、多くの方々の支えのもと学ぶ機会をいただけたことに感謝し励みしたいと思います。遠隔地で何かとお手数をおかけすることもあると思いますが、どうぞよろしくお願い致します。

学校改革マネジメントコース1年/教職員支援機構 目見田 紋未(めみだ あやみ)

今年度、学校改革マネジメントコースに入学しました、教職員支援機構(NITS)の目見田紋未と申します。

私は教員ではありません。教職員支援機構(NITS)という文部科学省所管の独立行政法人で、教職員向けの研修を担当しているプロパー(直接採用)職員で

す。教員免許は持っていますが、学校で働いたことはありません。そんな私が現在教職大学院の場で学ぶ機会をいただけていることに、とても感謝しています。

自己紹介の場ということなので、NITSの紹介を交えながら、私が今回このような学びの機会をいただ

くことになった経緯を簡単に綴っていきたいと思います。

NITS は、全国の教職員の資質向上に資する研修の実施や、研修に活用できるオンライン教材の作成、調査研究、教育委員会や教職大学院との連携推進等の事業を実施している組織です。

令和4年の中教審答申において、「新たな教師の学び」の内容面でも、その学びを支える条件整備の面でも、NITS は重要な役割を担っていることを指摘されました。それを受け、現在 NITS は「新たな教職員の学びの姿」を実現する「研修観の転換」を図っていくことをミッションと捉えています。

昨年度、私はNITSの今後の事業戦略等を考える「戦略調整室」という部署に所属していました。この部署では、一年間「研修観の転換」とはなんだろう？と日々考え、新しい教職員研修のあり方を考えるために様々な場所に視察に行き、書籍を読み、NITS の内外の人と対話を重ねてきました。これから NITS が何をしていけばいいか、どういう手立てを打っていいか、一から考える必要があったためです。

これまで、前例踏襲をベースにした研修の企画や運営をしてきた私にとって、この戦略調整室での業務は、見通しが持てず、わからないことだらけなまま進んでいく未知の体験でした。しかし、それは決して嫌なものではなく、むしろ前に進もうと悩み、考え、対話し、模索していく日々はとても楽しいものでした。

福井大学の取り組みには、日々このような検討を進め、学ぶことの楽しさを実感している中で出会いました。ラウンドテーブルの場に参加した職員や、NITS の研修やセミナーの企画の場で福井大学の先生方からのお話を聞き、自分が今行っている業務や検討している内容を考えたとき、「私もその場に『学び手』として参加してみたい」と思ったのを覚えています。

そう思っていた12月頃、NITS 内で「福井大学教職大学院の受験を希望する職員はいますか」という声かけがありました。通常であれば現職教員の方々が入学する教職大学院の学びの場に、一緒に参加する機会が得られるかもしれない。たくさんの方々と対話を重ねながら、学びを深めることができるかもしれない。そう思い、わくわくした気持ちで手を挙げました。結果、沢山の方に機会と援助をいただきながら、入学することになりました。

今年度に入り、私の業務は「研修観の転換」につながる、新たな研修「コア研修」の企画、運営となりました。コア研修は、探究型研修として実践と省察、知識の獲得や対話というプロセス全体を研修の対象としてデザインするものであり、知識を得るための研修というよりも、プロセスそのものの体験を通して探究的な力の育成と、探究をデザインする力の育成を図る研修です。この担当となると同時に、コア研修等のデザイン・運営に携わる NITS 職員自身の学びの場づくりも担当しています。

これらの取組を進める上で、教職大学院でのカンファレンスの体験はとても役立っています。対話や資料の内容はもちろん、教職大学院の学びがどうデザインされているかを考えることも大事な学びです。また、研修の企画を進めていく上で、学校現場のリアルな声を聞けることは、私に不足している「現場の経験」を迫体験し、じっくり考えることのできる貴重な機会でもあります。教職大学院の学びが始まって3か月と少しですが、既に「ここで学べてよかった」と実感しています。

経験値も、知識や知見も、何もかもがまだまだの私ですが、1回1回の機会を大切にしながら、2年間、沢山考え、学びを深め、何よりも楽しんでいきたいと思っています。これからも様々な場で皆様にお世話になります。どうぞよろしくお願いいたします。

学校改革マネジメントコース1年/社中央第一こども園 山田 晶子(やまだ しょうこ)

今年度より、「学校改革マネジメントコース」に入
学いたしました山田晶子と申します。

現在、福井市の私立・社中央第一こども園に教頭と
して勤務しています。この園において勤続25年以
上も経ちますと、これまでに受け持っていた園児が
既にお母さんとなりそのお子さんが本園に通ってい
る人もおり、私自身も年を重ねたと思うと同時に二
世代にわたって本園を利用していただく卒園児達に
大変嬉しく思っている今日この頃です。

保育界は、保母資格から保育士資格になるなど時
代の変遷に伴い、今日までにいろいろな変化があり
ました。昭和時代の一斉保育から、「保育指針」や「教
育要領」も改訂ごとに大きく改訂され、今日では子
どもの主体的な学びという保育が行われるようにな
りました。

また、最近では ICT が普及し、ドキュメンテーショ
ン等が現れ、保護者にも園内の保育等をわかりやす
く可視化して伝えるようにもなりました。

私の園の職員の年代層は、昭和世代が約半数で、最
近、昭和世代保育士は、「この間も聞いたのだけど…」
等と若い職員に積極的に声をかけています。今日の
急速な ICT 時代についていくために、これらが園内
の世代間ギャップを上手に埋めてくれるようなアイ
テムのような気もしております。

私が、「教職大学院で学ぶ」きっかけとなったこと
は、以下のことからです。

その1、私の職場の保育教諭は、仲がとても良いの
ですが、保育の事を保育教諭同士で相談し協力して

新しいことに挑戦するという前向きな姿勢に欠け、
比較的消極的集団であること。

その2、私立園なので職員の職場異動もなく、先輩
たちの自己流の保育に、各自がどっぷりと漬かって
満足していること。

これら2つの危機感からです。

ある、先輩園長先生に、この悩みを相談したら、「教
職大学院に入って、いろんな諸先生方と語り合っ
て学んでみたら？」と勧められ、私に出来るか不安がい
っぱいありましたが、その後、いろんな先輩方から背
中を押され、入学を決意した次第です。

私は、これまで就職してから長期間、腰を据えてじ
つくり学ぶ事は無かった為少し心配ですし、また、入
学当初から、個人的にカタカナ言葉には少し苦勞し
ていますが、最後まで頑張りたいと思います。

毎回、いろんな諸先生より、貴重な実践の話を聞か
せて頂いています。発表する先生の実践を聞きなが
ら、自分の園に当てはめるとどうなるのか？とか、そ
の学校の歴史や文化の背景はどのようなものなの
か？等々毎回、いろんな事を想像し、少しずつ理解し
ながら聴講させていただいています。とても勉強に
なります。

今後、私が自分自身で実践の組み立てをして、実践
し、振り返り、語り、直し、問いかけていきながら、
私自身と、私の園が今後どのように新しく変化して
いくのか楽しみです。これから、わくわくしながら、
私の狭い領域の世界も少しずつ広げていきたいと思
っています。

求めていた学びの場

学校改革マネジメントコース1年/品川区立東海中学校 山田 泰子(やまだ やすこ)

今年度から主に東京サテライトでお世話になりま
す。

私は中学校の音楽科教員として26年目を迎えて
います。これまで、八丈島で4年間、その後、北区、

品川区と異動して現在に至ります。特に北区の学校からは合唱指導に力を入れはじめ、2・3年生の選択音楽（品川区は令和元年度まで選択授業がありました）の履修生徒と共に、外部のコンクールに挑戦してきました。特に品川区での前任校には10年在職し、合唱を学校の特色として学校や地域、保護者がその活動を支えてくださり、合唱団の成長とともに学校全体が成長していく過程を目の当たりに経験してきました。合唱だけでなく、学年主任や生活指導主任も兼務するようになってから、学校全体に目が向くようになり、管理職の先生と学校経営について話すことも増えました。気づけば若い先生方が主体的に学び合って成長し、新しいアイデアを試している姿が学校の機動力になっていましたし、合唱を学校の看板としたことで、自分が今、どのような仕組みで、この恵まれた環境を整えていただいているのか、とても興味を持つようになりました。管理職選考を勧められ、なんとなく受験する一方で、私は管理職の器ではないという不安もありました。そんな時、現任校と一緒に異動した校長先生（先輩）から「自分のこれまでの実践をじっくり振り返ってまとめてみないか。それが必ずこれから管理職としてやっていく自分自身のためにも周囲のためにもなるはずだから」と福井大学の教職大学院を紹介していただきました。

学年主任や生活指導主任の立場から見える教員集団の課題、異動したからこそ見える課題を感じる中で、これまで経験してきたことだけを、経験として語って伝えるより、もっと説得力のある伝え方ができたらと、もどかしさを感じることも実際ありました。また、自分に近い場所のコミュニティにいる先生方には、一緒に学年を創り上げたり、分掌を動かしたりすることができ、共に創造することや、学び合う楽しさを実感しながら取り組むことができた一方で、管理職になった場合は、そのように直接的に関われない

場所から、どのようにそのような集団を創り上げるのか、集団が他の集団に良い影響を与え合うにはどのような仕掛けをしたら良いのか、そういった視点で考えたことがなく、管理職としての器不足に対する不安はこういったところからも増すばかりでした。本学の学校改革マネジメントコースでの学びは、まさしく今の自分が一番必要としている場所ではないかと思い、進学を決意しました。

私が本学でやることの一つは、これまでの自分の実践を振り返り、まとめ、理論と結び付けることが大きな課題だと思っています。しかし、思い返せば10年ほど前にも、縁あって知り合った当時の教科調査官にも同じ様なことを言われていました。「なぜ、生徒にこのような力がついているのか。自分では意識していないだろうけど、どのような言葉で、どのようなやり方をしてきたのか。それを振り返り、まとめることで、やっと全体に発信できるんだ。」と。しかし、どうやら私はそのような振り返りや省察が苦手で、ずっと経験と感覚でここまでできました。先輩方の「実践報告」を読むことで、振り返り方、省察の仕方、まとめ方等を学ぶことができることも自分の課題解決にとっても役立ちます。また、入学後からのカンファレンスでは、自分の知らない分野での実践、考え方、理論、見通しを知ることができ、とても勉強になっています。普段の業務に追われ、自分では見つけられない書籍や考え方に触れられること、自然と自分の学びたいことが周囲に溢れている環境に出会えたことがとても嬉しいです。更に、職場で直面している苦しい状況についても、みなさんが親身になって手立てを伝えてくださったり、お声がけくださったりすることも、大変心強く、救いとなっています。

生徒だけでなく、先生方が生き生きと活躍する学校を創るために必要なことの手がかりを学んでいきたいと思っています。よろしくお願いします。



インターンシップ・週間カンファレンス報告

カンファレンスを振り返る

授業研究・教職専門性開発コース2年/福井大学教育学部附属義務教育学校後期課程

多田 朋生

今年度から福井大学教育学部附属義務教育学校後期課程でインターンシップを行っている。昨年度までは坂井市立丸岡南中学校でインターンシップを行っていた。非常勤講師としても働かせていただくことになり、4月は環境の変化に慣れつつ、授業も行っていくという日々であった。初めて授業を1年間持つこととなったわけだが、全く授業が上手くいかないと感じる日々が続いた。その理由の一つとして、単元のデザインが全くできていなかったことが考えられる。きっかけは授業内での生徒の言葉である。「先生、何がしたいか良くわかりません」。自分はこの言葉を聞いて、はっとした。この言葉が生徒から聞こえてきた時は、授業者の自分ですら、単元で何をしたいのかが良く分からなくなっていた時期であった。附属義務教育学校の授業は探究が重視されている。この時の自分は探究について、「子どもの声を聴きながら、それを授業にしていけばよいのかな」という漠然とした考えを持っていた。確かに子どもの声は聴くようにしていたつもりである。しかし、子どもの声だけで授業を進めていくと、全く授業の方向性が定まらない。自分の探究についての甘い考えだけで進んできた授業は終わりを迎えた。そこからは単元についてのデザインを意識するようにした。しかし、単元のデザインと言っても、授業が始まっている中ですぐに考えられるものではない。まずは授業の中で、教師が引っ張る部分と、子ども達に任せるところを意識して、一時間一時間の授業を行うようにしていった。少しずつ単元のデザインが意識できるようになってきたが、気が付けば、7月中頃で、もう学校は夏休みである。単元の進み具合は、前述のこともあっ

て、かなり遅くなってしまっているクラスもある。自分の考えが甘く、至らない点もたくさんある中で学校の夏休みに入るが、この夏休みの間でよく反省して、まずは夏休み明けの授業で失敗を活かせるようにしたい。そして、来年度以降も今年の経験を思い出して、学校で頑張れるようにしていきたい。

毎週の金曜日に開かれているカンファレンスについても触れたいと思う。このカンファレンスでは、毎週のインターンの振り返りを行ったり、理論を読んで教育にどのように活かして行くのかを考えたりしている。私が2年目になって金曜カンファレンスを運営する側になって感じたことは、人のことについて考える時間が増えたということである。ここでの人とは、自分と同じ2年目のストレートマスターの院生、新しく入ってきた1年目のストレートマスターの後輩達、そして教職大学院の先生方である。同級生と運営会議をしていく中でいろいろともめるようになったり、1年目の後輩のことを考えてカンファレンスが意味あるものにするにはどのようなグループにすると良いのか毎週のように考えたり、大学院の先生方にカンファレンスに入ってもらって共に考えてもらうためにあれこれ悩んだり。このニューズレターを書いているとちょっとマイナスなことを考えることが増えたのかな？と感じるが、それだけ人のことを良く見て考えるようになることができてきたのだろう。1年目の自分と比べると、2年目の私はいろいろと考えるようになったなあと改めて感じる。どれだけ1年目考えていなかったんだろうという話になってきてしまうが。最近の私は、カンファレンス

に行くときに少しでも楽しく行こうという気持ちを持って臨むことが多い。私はいろいろ考えることが増えると、楽しむという気持ちがどこかにいつてしまう。だから、楽しむ気持ちを少しでも忘れたくないのだ。何事も、少しでも楽しみながら活動していきたいものである。その気持ちが他の人にも伝わったらなあと思う。

2年目になって、毎日内容の濃い日々を過ごしている気がする。最近の私は少々疲れ気味である。頑張った自分をほめて、これからの残りの大学院生活を送るために、エネルギーを貯めたいと思う。このニューズレターも少しだけ楽しんで書くことができた。何事も少しでも楽しむ精神でこれからも進んでいきたい。

価値観を変えたい

授業研究・教職専門性開発コース2年/福井県立鯖江高等学校 富田 一葵

私は、今年度福井県立鯖江高等学校でインターンシップを行っている。昨年は羽水高等学校で主に数学を学んでいたが、今年は教科「情報」に力を入れて学んでいる。教科「情報」は必修科目になったのがつい最近のことであるため、先行研究や授業実践例が比較的少ない教科である。そのため、教職大学院での授業実践で求められやすいアクティブラーニング、探究学習、生徒の主体性を活かす授業といったような授業を考えると参考資料が少ない。私は教科「情報」に対してどう向き合っていくべきなのか、どのような知識技能が必要になるのかを改めて見つけて身につけたいと考えている。鯖江高校には、県内でも数少ない情報を専門とする先生方がおられるため、その先生方がどのように授業をするのか1年間参観して、私自身の授業へと還元できるように学びたいと思う。

2年目となるインターンだが、早くも悩みが出てきた。「何を目的に授業すればいいのか」である。昨年の数学では解きかたの共通性などに着目して、いろいろな問題に用いて解決することができるかを確かめるような授業を行ってきた。その過程で、数学の公式や法則を理解してもらうことやそれらの公式や法則を活用して論理的に問題を解決する力を身につけられるように意識していた。学習指導要領に沿いながら、テストでも問題を解くことができるようになることを目的に授業をしていた。しかし、情報ではそ

うはいかなかった。一番の理由として、私自身の考え方に問題があるのではないかと考える。私はどうしても情報を暗記教科として見てしまう。ITパスポート試験、情報処理検定などの試験では如何に暗記できているかが重要である。“情報モラル”、“サイバーカスケード”、“著作権”等々、情報には多くの単語があり、その事例と一緒に学んでいくことになるのだが、どう教えればいいのか分からない。暗記教科は物事を知って、自身が困らない程度に活用できるようにになればいい。それが私の暗記教科に対する考え方である。そのため私はこの単語を説明して、事例と一緒に体験してその先に何をすればいいのか、何を目標せばいいのか分からなかった。失礼ながら、一度私自身が暗記教科の一つだと考えている社会科を専門教科とする同期にどうしているのかを尋ねてみた。その時、同期から「社会科は暗記教科じゃないよ」と言われた。私は情報や社会科を暗記教科だと思う一方で、暗記教科とはとらえない人もいる。この差は何だろう。この違いは何だろう。質問した日から2カ月近く経っているが、未だに分からない。情報と数学の違いは何であるのか。他の先生方だったらどのように考えるのかを知ることを通して、私自身の教科「情報」に対する価値観を変化させていきたいと思う。

情報は2単位授業として学校で扱われているため、週2時間しか授業がない。考査の回数も他教科より

も少ないため、先日、一回目の考査が終了した。考査終了後に、生徒から質問された。それは「テスト直してどうやればいいんですか」という質問である。テストの内容によって様々な方法があると思うが、今回のテストでは共通テストを意識したことや授業進度的に範囲が広いこともあり、マーク式にしていた。その結果、ほとんどの生徒のテスト直しが正しいマークを書く、あるいは正解の単語を書くことで終わってしまった。私は提出されたテスト直しを見ながら、本当に分かっているのかなと疑問を抱き、小テストを実施することにした。クラスのほとんどが間違っていた問題をそのまま出した。正答率は考査時とほとんど変わらなかった。考査の時に正解していた生徒はそのまま正解し、間違っていた生徒はそのまま

間違っていた。この小テストを返したときに先述の質問をされた。この時、私は具体的に答えることができなかった。正しいテスト直しのやり方があるのか、そもそもテスト自体が生徒の何を測ろうとしていたのか、改めてテストをやる、それは当たり前のこととして認識していたがその当たり前に疑問を持ち、より良くしていくために考えていく必要があるのだなと知ることができた。

強い固定観念を持っている現状ではあるが、何のための授業、テストであるのかを今一度考えなおすことで新たな学びに向かっていきたいと思う。

コミュニティの中で生きていく

授業研究・教職専門性開発コース2年/福井県立丸岡高等学校

酒井 俊典

今年のインターンシップも金曜カンファレンスも自分にとっては大きな変化があったと感じている。

インターンシップ先の高校に自分を含めて3人のインターン生がお世話になることになった。大きな変化の1つがインターンシップの回数である。昨年は免許取得プログラムの履修の都合上、週1回かつ途中で大学での授業のために帰宅していた。今年からは週2回に増え、両日ともに丸一日インターンシップが可能になった。さらには、毎週月曜日と木曜日にはインターンシップ先の高校にインターン生がそろろうのだ。自然発生的にインターン生同士の会話が大幅に増えた。

これだけでなく、インターンシップ先の高校の教頭先生とインターン生で開催する“校内カンファレンス”が発足した。一番大きな変化と言えるだろう。インターン生が抱える課題をリアルタイムに把握し、教頭先生ならではのご意見をいただいたり、インターン生の気づきを教頭先生にお伝えしたりと参加者

それぞれに実りのある時間だと感じている。この会を打診してくださった教頭先生には感謝しかない。

同じ方向にインターン生が向かっている雰囲気を感じている（自分だけかも知れないが...）。昨年のインターンシップではやりづらさを感じる場面も多少あった。今、そのやりづらさを分析するとコミュニティ内での方向性がそろっていなかったのではと考えている。その経験から同じ方向を向いているコミュニティでの話し合いや活動によりやりやすさを感じている。同じような方向性を持っている人を巻き込んだコミュニティづくりが重要である事を痛感する半年であった。今後は、この会にメンター教員も参加して欲しいと陰ながらに思っている。

金曜カンファレンスについても大きく変化があった。何よりも自分らが運営にまわることが一番大きな変化だろう。

年度初めのM2は同じ方向性を持って進んでいたような気がする。今もその方向性は変わっていないと

思っているが、コミュニティとして疑問を感じるものがあつた。正直なところ自分が努力不足の部分もあるのだろうが、他の M2 の考えが分からなくなることが多かった。分かろうとすることに精一杯で自分の考えすら分からなくなった。真っ暗なトンネルに突入したような感覚。不安だらけだ。

インターンシップ先も M2 もどちらも同じ方向性を持っているはずなのに居心地が違う。同じ方向性を

持つことだけがよりよいコミュニティ形成に繋がるということではないのだと分かった。しかしながら、何がこの違いを生んでいるのかについてはまだ分かっていない。分かっていないからこそ辛い日々である。

しかしながら、院生の内にこの経験ができたことは大きな糧になるとも思っている。今後も葛藤と苦悩を繰り返しながら自分の成長につなげていきたい。



ミドルリーダー/マネジメントコースだより

「人とともにあること」に向けて

ミドルリーダー養成コース 2 年/奈良女子大学附属幼稚園

辻岡 美希

教職大学院での学びが 2 年目となり、毎月のカンファレンスに集まる仲間も、心理的安全性とともに過ごせる仲間として定着しつつある。その中で自分の考えることを言葉にすることが楽しくなり、他の人の考えを聞いて刺激を受けながら、それをそのまま受け止めるのではなく、自分なりに考えを再構成することが少しずつ習慣づいてきている気がする。

一方で、それぞれの人の特徴がなんとなくわかってきて、「この人はこんな人」といったキャラクターづけがなんとなく自分の中にできてきた。例えばある先生は、学校の中でプロジェクトを立ち上げ、学校の外部とも連携を広げていった人だから、自分のしたいことをはっきりともって、リーダーシップをとって進めてきたのだろうと、自分とは異質な人物として捉えていた。

ところが、先日のカンファレンスで「職位が変わることによる学び」についてその先生が話題提供者となって話を伺う機会があり、管理職となったその先

生が「これから何をしたいか」と問われ、「特にしたいことはない。求められることを形にするだけだ」という返事が返ってきた時、とても意外に感じた。きつと「こういう学校を創りたい、だからこういう風に変えていきたい」といったビジョンが出てくると考えていたのだ。

私自身は、これまで周りに求められたことをできるだけうまくいくように実現することをモットーに仕事をしてきた。そのことが、これまでの当たり前疑問を持たず、スムーズな手順を追い求める姿勢を生み出してきたことに昨年のカンファレンスで気がついた。その先生が話す「求められたこと」と私のそれは何が違うのか、これまで思い描いてきたその人のキャラクターとの違和感を覚えてもやもやとしていた。

ただ話を聞いているうちに、私がしてきたことは求められた「課題解決」について行ってきたことであるのに対し、その先生が「求められたこと」と表現さ

れたのは、そのコミュニティの中でこういった役割を求められているか、ということだった。その組織の中で必要とされている役割を捉え、その中で自分ができることを実施していく。それは単に目の前の課題をどう解決するかというよりも、もっと大局を見て、数年先まで見据えたうえでの判断が必要であり、そのためには状況を読む力やそれについて自分の考えをもつことが求められるのだろう。そう考えると、その先生が「特にしたいことはない」と答えたことは、その組織に必要なものを捉え対応していくということだったのだと思い、少しもやもやが晴れた気がした。

教育の中で子どもを理解するうえで、私たちはつい「この子ってこういう子」とカテゴライズしたり、キャラクターづけをしたりしがちである。そうすることで、相手のことが分かったような気になってしまう。特に自分の思いを言語化しにくい幼児に相対した時、この子はこういう傾向があるから、きっとこう考えるだろう、と判断してしまうことが多い。

しかし、実際に子どもと向き合って話を聞いてみると、私が思う以上にいろいろと考えていたり、思いを持っていたりする。小さい子どもだからきっと言語化できないだろう、この子にはきっとわからないだろう、と思っていっても、大人が思う以上に理解し考えたとえでの行動であったりする。以前、欠席した翌日にみんなと一緒に昼食をとりたがらず、一人離れ

て食べている子どものことを、「マイペースな子どもだから、何か気持ちが向かないことがあったのだろう」と勝手な決めつけで、様子を見ていたことがあった。保護者にそのことを伝え、翌日保護者から「昨日休んで、まだ咳が出ているから、うつしたらいけないと思って離れて食べたと言っていた」と聞いた時、私が話を十分に聞かずに決めつけていたことを反省した。カンファレンスで、ふとその時の後ろめたさを思い出した。

今私たちが目指している「子ども（人）とともにあること」は、相手を変化し続けるものとして捉え、他人が勝手に評価を決めつけずに丁寧に向き合う、ということにあるのかもしれない。対話の姿勢もまたそうで、以前カンファレンスの中で読んだバフチンの対話思想の中で「他人をキャラクターづけることは、人を『人格』としてではなく『モノ』として扱っていることだ」と書かれているのを見てもややもやしていたことが、実感として少しつながった気がした。生きている限り人は身体的にも内面的にも変化し続ける。その大前提に立ちそれを尊重していくことが、相手と向き合うことなのだろう。

毎月のカンファレンスの中でいかに学びを見つけるか。他者も自らも常に変化していることを意識し、自分自身の考え方や姿勢と向き合い問い直しながら、それを実践に返すことの面白さを感じて学び続けていきたい。

何のために？ ～意味を考え、価値を知ること～

ミドルリーダー養成コース2年/静岡市立清水桜が丘高等学校

小泉 真由子

教職大学院に入学し、あっという間に一年が過ぎた。この一年間で多くの先生方と繋がり、対話し、語り合ってきた時間は私の教員人生の中でとても刺激的な時間だった。ここまでの大学院で、これまで当たり前に過ぎてきた仕事に一つ一つの意味付けをすることを学び、それぞれの価値を捉える目を養っていた。そして、仲間との対話から自分の考えているこ

とを自分の言葉で話し、自分の耳で聞く。この循環により、物事が違った角度から見える世界があることを知った。同時に、心理的安全性の高い場で聞いてくれている仲間がいること、その仲間が客観的な立場から物事を捉えたことを伝えてくれること。このことが自分自身を見つめ直すと共に、自らの言動への新たな気づきが生まれ、何のために？という思考が

巡るようになっている。そして少しずつではあるが言動に意味付けをすることができ、その瞬間にその言動のもつ価値を考え知るようになっている。

現在所属校では大きく三つ、3年生担任、研修課として総合的な探究の時間、教科では地域連携授業を担当している。第一に担任業務だ。赴任して三年目、前任校が定時制課程の単位制高校だったため全日制の担任はとても久しぶりで、これまでとは違ったスタイルの私自身がいることにも気付くことができる。それは前任校での経験が大きい。一人一人に目を向けること、話をじっくりと聞くこと、話すことをしなくてもそこに存在することで思考が巡っているということ、待つこと。個の成長はそれぞれ違っている、同じではない。そして「普通」という一線を引くことは決してしてはいけない。この前任校の生徒たちから学び得たことが現在のクラス運営に活かされていることを改めて毎月のカンファレンスから学び感じることが出来たことは有難い。だからこそ、今任されている生徒の成長のために自分には何ができるのだろうと日々思い続けている。また、対話のみならず夏のサイクルでは多くの本に出会い触れることで心理的安全性が確保された環境の重要性を再認識した。理論と実践を行き来するからこそ、思考が巡った瞬間だった。生徒の心の声に耳を傾けることを忘れずに、何気ない日々のコミュニケーションを大切にしながら個々が抱える課題に向き合い、生徒の変容に気付く教員でありたい。3年生はここからが勝負である。だからこそ、大学院で私が学び得て感じているように、生徒たち自身に自分の価値を見出してもらえよう、これまでの学びの意味を知ること、未来へと続く進路実現に向かえるように共に歩んでいきたいと思っている。

第二に総合的な探究の時間の企画を考えていく探究委員会の運営である。本校では職員のビジョンの共有がなされず物事が進んでいく傾向がある。正直、

探究活動を職員が連携して実施するにはなかなか難しい現状があった。そんな中、私はその企画運営を命じられ、どう展開すればいいのかを悩んでいた時にこの現状を知る教職大学院を修了された静岡県立駿河総合高校の遠藤先生にも何度も相談をすることができた。遠藤先生の助言もあり、職員の意識を統一させる目的でまずは地域コーディネーターの外部団体を入れながら各学年で探究活動を実施することとした。外部団体といってもプログラムが提供されるだけで実際は教員が学校の実態に合わせ試行錯誤を重ねながら運営していかなければならない。そのため、やりたくないのに担当となってしまった先生方とのやりとりの中でさらに悩み苦しんでいった。ただそんな時、私にはこの教職大学院があった。ここで改めて実践を語り振り返ることで学んでいくことを体感した。今年度は新たなメンバーが加わり各学年部での主担当している先生方と手段が目的とならないように何のための学習なのか、ビジョンの共有を意識しながら対話の時間を設け少しずつではあるが進むことができている。

第三には地域連携企画だ。教科の学びの中で実際に多くの企業の皆様のご協力を得て授業を展開することができている。ただここでも同じ教科の先生方との意識の共有がされず様々な場面で連携が乏しい現状があり、職員の意識改革と共に改めて組織の在り方が課題となっている。

いよいよ大学院2年目、これらの所属校の現状と向き合い、職員同士で「何のために？」という問いへの答えに意味付けができるよう、そして自然と対話が生まれ、活動のコンセプトを共に考えられる学び合える環境づくりに挑戦していきたい。そのためにも実践に取り組み、その都度記録をして思考を巡らせていくことを繰り返していきたい。私自身の未来に続く道標となるような長期実践報告になるように今後も大学院で前向きに学んでいきたいと思う。

「学びは相似形」を原点にした取り組み

学校改革マネジメントコース2年/沖縄県教育庁宮古教育事務所 **本村 税**

「教師の学びの姿も、子ども達の学びの相似形である・・・」福井大学教職大学院に入学して最もよく耳にし、日々、自身が“迷った”ときに立ち返る原点、そして方向性を示すものとして大きく作用する言葉である。子ども達の主体的な学びが求められている中で、教師自身がそのロールモデルとして、子ども達へ大きな影響を与えていること、そしてその教師自身の学びが子ども達のためだけにとどまらず、自身の教師という専門職としてのやりがいや幸福感につながっているという事実を目の当たりにすることが多くなった。

カンファレンスやラウンドテーブルを通して、経験や立場などの異なる様々なキャリアの方との触れ合いは、その方の教育実践の内容と、そのときの心情、そして何よりも今現在その実践を振り返って本人が感じていることなどを話し、聞き合う場として、擬似的ではあるが体験することを可能にしている。目を輝かせながら生き生きと実践報告を話す姿から、その場にいた子ども達の様子と成長を感じ取ることができる。「こんな一生懸命になって学び続ける先生だったからこそ、きっと子ども達も一緒になってたくさん学び、大きく成長できたのだろう。自分もそんな先生のように・・・」という憧れに似た思いを抱くとともに、今現在自分自身がその先生と対話できるという環境はまた、自身を鼓舞させるものでもある。

理論書を片手に今求められている教育のあり方、学校組織のあり方などに関する理論的な学習と、先人達の教育実践の追体験、自身のこれまでの実践の省察や今現在の指導主事としての研修業務など、教育理論と実践的な教育活動とを往還させ、抽象と具体、概念と現実を行き来させることで、少しずつではあるがこれからの教師としての自分自身の立ち振る舞い方、仕事の仕方が見出せるようになってきた。

私自身、福井大学教職大学院への入学と同時期に教育事務所での勤務が始まった。当初は大学院での学びが、「学校現場にいる先生方だからこそ実践に結

びつけることができるのではないか」「どう指導主事としての学びにつなげていけば良いのか」などという不安もあったが、今となれば現在の立場の自分にこそ必要な学びであることを実感している。

教育事務所の指導主事としての主な業務の一つに各種研修会の計画、運営がある。各主事が担当する研修会の立案をし、指導班会議に掛け、承認を得た上で学校現場へ発出、開催となる流れである。教育行政の特質上、県の教育施策の伝達や各種調査結果の報告等、行政側から学校への一方通行的な説明や報告が多い中、いかにして各学校の担当の先生が学校へ持ち帰り、実用性と効果のある研修にしていけるかが大きな課題となっている。これまで「こちらが課題を明確に示し、わかりやすく課題解決への糸口を示す」という、現場にできる限り負担をかけないようにとの配慮で研修を行なっていたように感じる。しかし学校側からすると、捉らえてもいない課題を示され、考えるまもなくその解決方法まで提示されるといった、まさに（言葉は悪いが）お腹も空いていないのに餌を与えられる「フォアグラの鴨」状態である。そのような先生たちの主体性のない状況で、研修の内容がはたして現場へと浸透していくのだろうか。たとえ現場に降りたとしても、最終到達点である子ども達へのアプローチはどのようになるのだろうか。我々が先生達へ伝達したように、先生も子ども達に同じように指導してしまうのではないか。そのような学びで果たして子ども達に目指す力がはぐくまれるのか……。そういった考えが指導班主事全体で浸透、共有できるようになってきた。

現在、週1回の班会議での議論が盛んに行われている。各指導主事から提案される研修案一つ一つに前述の視点に立った熱い議論が交わされる。先生たち一人一人が主体的に研修に臨むため、当事者意識を持たせるためにどのような工夫をするのか、課題を見出させる調査資料とその提示の仕方、解決に向

けた参加者相互の協議の方法など、議論の内容は多岐にわたる。

また、班会議以外の場での議論も盛んに行われている。3ヶ月前に休憩時間に皆が集まる場所の壁にホワイトボードが設置された。お菓子が置かれた丸いテーブルを囲み、お菓子を頬張りながら研修会で配付する資料や協議内容、方法等の検討がされ、指導主事相互の協働的な学びにつながっている。まさにラウンドテーブルである。

これらの会議や対話が成り立つ大きな要因として、誰でも自分のタイミングで発言できる受容的な雰囲気と承認的な言葉掛けがそこにはある。そのような協働的な組織にすることで、自身、学校の研究授業等

での指導助言も、自ずと一方的な助言ではなく子供の姿をもとに授業を振り返りながら、共に課題を見出し、解決策を考えていくという協働的・探究的なスタンスに変化したように感じる。

子ども達に求められている学びの姿こそ、教師に求められている学びの姿であり、教育行政に携わる指導主事の学びでもあることを痛感する日々である。自身が学びの足を止めたとき、行き着くところは子ども達の学びの足踏みであることを心に留めて残りの教職大学院での学びを充実させていきたい。

喫緊の課題がある。購入した教育に関する理論書数冊を傍に置くだけで学んでいる気になっている自分にも最大限の注意が必要である。

社会に送り出す責任

学校改革マネジメントコース2年/東京栄養食糧専門学校

金澤 敏文

「先生、試験のためにどのような勉強をすればよいのですか」。定期試験まで1か月を切った7月になるとこの類の質問が急増します。合格点以上を効率よく獲得するため、何の悪びれもなくこのような言動にでる学生にはむしろ微笑ましさを感じます。どうやら、この傾向はここ数年顕著になってきているようです。合理的と言ってしまうまでもありますが、少し学習の本質から逸れているように思えます。学生は学びにどのように向き合ったらよいのか、それが解らず、高校までの経験から、ただ、あることを覚えることが学びかたで、それも、どこが大事なのかを教えてくれないと解らない、だからできないし難しいといった形が多いように思います。ここを自分で乗り越えられていないから、探求心が形骸的になっているのだと考えます。対応策として「伴走する」ことが求められますが、このくらいの世代には「おせっかい」として煙たがれることが多いようです。だからどのように声をかけて導くか、自分で乗り越える一科目に止まらない取組指導がとても大切なように思います。その具体的な取組を描くことは難儀かも

しませんが、これからの専門学校のあり方に望まれるものだと思います。それには教員が現状をしっかりと認識し、どうしたらよいか、知恵を絞る話し合いの場を自然に発生させる必要があります。得てしてこのような話し合いは散漫になりがちなので、ある種のたたき台を用意しながら、できる限り大きな円で着地地点を示しておく必要があります。正解はありません。ただ飛ばしてみても着地する単純な往還を発生させて、できればそこに意味づけ、価値づけができるのが望ましいです。

さて、これらのことは時代の流れとして片づけてしまいがちですが、少なくとも過去3年余に及ぶ特別な期間は学習の形成に大きな影響を与えたようです。右も左もわからないまま始まった遠隔授業は、まるで階段を大股で飛び越えて、2階、3階とゴールを目指す、そのように目指さざるを得なかったのであろうと容易に推察できます。その結果、結論に至るまでのプロセスを考えたり、振り返ったり、修正したり、協力したりする経験が減って、これまでない合理性が形成されたのかも知れません。私たち専門学校に

求められるのは正しく「対話的かつ協働的な学び」の構築なのであると思います。本校を卒業した学生は社会に出ていきます。社会は残酷で学校のような配慮をしてくれません。この学生たちが社会に残されてしまわぬように、まず私たち教職員がこう

いった現状を理解しておくこと、そして学校の組織全体で学生を上へ押し上げていくようなコミュニティーを作りたいと考えています。

新しい出発の中で

学校改革マネジメントコース2年/福井県立武生高等学校

伊藤 貴子

福井大学教職大学院2年目がスタートして4ヶ月が過ぎようとしている。この4月から11年勤務していた武生東高校から、武生高校への異動となり、あっという間の時の流れであった。

母校でもある武生高校では、これまで在職されていた先生方の高い志により、教員間で学びあうプロジェクトチーム（PT）が30代教員を中心に自主的に形成され教科連携の授業が積極的に行われている。PTからの案内で放課後、年齢を問わず多くの教員が参加する学校文化が出来上がっていることは、他校で勤務していた私にとって非常に羨ましかった。4月から実際参加させていただいているが、とても刺激的である。

そんな中、この4月から更に新しいユニットが誕生し、よりよい学校づくりに向かうこととなった。

「カリキュラムマネジメントユニット」と「学校改革ユニット」の二つである。前者は同じく教職大学院で学ぶ島田直子先生がメンバーの一人となり、後者を自身が拝命した。ともに、3名の40代・50代の異教科教員がチームメンバーとなっている。

正直、島田芳秀校長先生からユニットリーダーの話を頂いた際は不安も大きく引き受けてよいものか迷いもあった。異動したてで先生方と同僚性も築けていない中で何ができるのか…。しかし、校長先生から「結果は求めないから、よりよい学校づくりのためにまずは挑戦してみしてほしい」と背中を押して頂き「やらない後悔よりやって後悔」と引き受けることにした。自分にとっては1年目でも、生徒や他の先

生方にとっては地続きの大切な1年である。外の目としての視点を持っているからこそその気づきもあり、そこから芽吹かせることができることもあるのではないか。今なら、福井大学教職大学院という相談の場と、学びの機会があると、思いを新たにした。

では、どのように進めていけばよいか。日々の忙しさの中で、思いや実践が流れてしまわないよう、メンバーの後押しもあり、まずは対話の時間を確保することにした。3人のメンバーの空き時間である木曜4限目を活用し、お菓子を持ち寄りながら対話を進めている。第1段階として武生高校の強みと弱みを検証し、そこから見える改革の柱を立てていった。そして、それを島田校長先生、三田村教頭先生と共有し、学校ビジョンとのずれを調整し、何とか6月期の職員会議で、いくつかの提案を先生方に示すことができた。それが以下の四本の柱である。

①普通科の魅力化と魅力発信

②1人ひとりが自分の価値を実感できる取り組み

③教育のDX化

④教員の多忙化解消

①に関しては、1から3学年の普通科6クラス681名に代議員の協力を得て、クラスルームでアンケートを取り、武生高校普通科が魅力だと感じていることを挙げてもらった。また、「デメリットもふまえより良くなるにはどうするとよいか」についても意見をもらった。1日のみの記入期間で短時間だったが、239名の回答を得た。生徒からもらった提案は中学3

年生対象のオープンスクールで美術部と協働し活用する予定だが、語ることでできなかった声をどう掘り上げていくかについてもユニットを通して生徒ともに考えていきたい。この回答結果は全教員と共有し、課題については改善策を考えていきたい。

④の多忙化解消に関しては、職員会議後に前後で4人ほどのグループになってもらい、付箋に書き込む形で全教員にアイデアをいただいた。部活動当番の廃止や模試監督の委託など、実施可能なものを関連の校務分掌と連携した上で試行し、問題点を洗い出した上で実施していきたいと考えている。また、

この点については生徒の自走力と連動してなされるべきだという意見を同僚からいただいております、その通りだと考えている。

これら改革の実践はともに大学院で学ぶ島田直子先生、ユニットメンバー、大学院でのカンファレンスでの対話やアドバイスに支えられ、試行錯誤のしながら進んでいる。結果を急ぎすぎず、生徒の声や同僚の先生方の声をきく機会を大切にしながら、蟻の目と鳥の目の二つを大切に、目の前の生徒たちを大切にしながらも、全体を俯瞰し進めていきたいと考えている。



月間カンファレンス/ラウンドテーブルだより

ラウンドテーブルで今一度考え直したこと

授業研究・教職専門性開発コース2年/福井大学教育学部附属義務教育学校後期課程

渡辺 昇希

私が参加したラウンドテーブル ゾーンE では、「これまで活動を進める中で、どのようなサポートがうれしかったか？それは自分にとって役に立ったか？」「今活動を進める中で、あなたにとって最高のパートナーは誰であるか。そのパートナーはあなたにとってどのような存在か」という主に2つの問いについて、中学生2人と、新潟県からお越しくださった先生と話し合った。私は他の人にたくさん話してもらおうと気を配りながら話していた。自分にとっては何気ない会話だったのだが、ゾーンEが終わる間際、中学生2人が「ゾーンEのような、自分の気持ちを素直に話せる場所があるのは嬉しいし、今日自分のことを話せてよかったです」と声をかけてくれた。

私にとって金曜カンファレンスや月間カンファレンス、ラウンドテーブルのような、ほぼ初対面の人たちがある場所に集まり、それぞれの進捗や悩み事、教育について語りあう機会はいつしか当たり前になっていた。しかし、この2人の発言を聞いて、私は普段カンファレンスを行っている意味について考えることができた。

私はカンファレンスの中で話すのは苦手であり、できるのであれば参加したくない。なぜなら内容を瞬時にまとめて話すことは苦手であるし、話せなかったら話せなかったで「また話せなかった」と自分を責める自分がいる。そして何より、他の人の実践やその週であったことを話すと、どうしても自身と他の人を比べてしまい、その場にいることが場違いのよ

うに感じてくるからである。ここ最近はそのように思うことは少なくなったが、話すことに精いっぱい、話し終えても私の中には何も残っていないことがほとんどである。しかし、2人の中学生の発言の後、カンファレンスは話すことももちろん大事であるが、話すことで自身の考えだけでなく、その時、自分がどんな気持ちでいるのか、立ち帰ることができる場ではないのだろうか、少しずつ考えるようになった。このことは教職大学院の先生から口酸っぱく言われてきたはずであるが、その時は何を言っているのかさっぱり実感がわからなかったし、自分には関係のないことだな、と思っていた。けれどもこの時になって

初めて先生の言っていたことがどういうことなのか、あらためて実感した気がした。

教職大学院で行う活動は私にとってとても難しいことばかりであり、ついていけなくなることも少なからずある。しかし、それらの活動について振り返ってみるたびに考えの違う者同士がお互いの考えや想いを話し合う大切さなど、私を変えてくれるような、重要なことに少しずつ気付いてきているように私は感じる。これからも苦難は続くと思うが、その苦難に向き合い、大事なことに一つ一つ気づいていきたい。

クロスセッションでの発表を経て

ミドルリーダー養成コース2年/カリタス女子中学高等学校 稲川 理子

6月のラウンドテーブル、2日目のクロスセッションではM2ということで自分の実践報告をすることとなった。去年は聞く立場だったので、持ち時間1時間以上の発表をすることに緊張しながらも、どんな意見をもらえるのだろうとワクワクもしていた。

当日私が発表したことをかいつまんで書くと、まず今最も興味を持っているプロジェクト型学習（PBL）と学びのユニバーサルデザイン（UDL）についてお話しした。昨年度の夏の集中講座で読んだ「福井発 プロジェクト型学習」の情報や自分の知識・経験を基に、PBLの概要、なぜPBLが有効と考えている・考えられているのか、そしてPBLを支える教員の姿勢をお話した後、UDLの概要・考え方についてもお話しした。その後PBLとUDLを意識した授業の実践報告を行った。

私の勤務校であるカリタス女子中学高等学校の中学英語科には、一般クラスと英語学習歴がある生徒向けのアドバンストクラスの2種類のクラスがあるが、その内より発展的な授業を行っているアドバンストクラスに焦点をしばって、過去2年間の取り組みについて語った。授業実践の中で特に苦労してい

る点としてはPBLの課題設定の難しさを挙げた。帰国子女が多いクラスとはいえ、外国語である英語で探究的な学びをするというのはなかなか難しい。また英語を使う必要感を重視すると、生徒たちにとって身近でない世界の課題（危機世界遺産やウォーター・クライシスなど）を設定しがちであり、そうすると解決策を深く考えられない・解決策を考えても実行できないなどの問題点が挙がってくる。

また授業以外にPBLを実践した場として、「グローバルリレー講演会」という課外活動の報告も行った。勤務校では毎年中学3年生・高校1年生対象に「グローバルリレー講演会」という行事が行われている。そこでは有志で集まった生徒たちが講演会中に使うワークシート作成や講演会後のワークショップの内容を考え、教員はサポート役に徹する。ここで悩まされたのは、教員の介入が「適切な介入」となるのか「教員の価値観の（無意識の）押し付け」となるのかの判断が難しいということだった。

以下、発表後のフィードバックでいただいたご意見・アイデアをまとめておく。

中学での探究的な学びのテーマ設定について

やらされ感はNGで、いかに自分ごとにするかがポイント。例えば日本の中高生が実際にアクションをおこしている例を紹介すると刺激になるのではないかな。またTikTokを使って実際にショート動画を作るなどをすると課題が身近に感じられ面白いのではないかな。

教師の介入について

全ての教育活動の大元の目的は「子どもの成長の為」。教員の介入を考える時、その目的からは絶対にずれてはいけませんが、逆に言うとそこからずれなければ良い。脱線した先に、元の狙いとは違う学びがあることもある。そういった時に思考が深まる。

失敗の次のNext Action

上から教えられてうまくいくよりも、失敗してその学びを次に生かすことの方が大事。失敗を奨励する。しかし失敗してそのまま…ではダメで、振り返り次に生かす機会を設けることが必須。

毎月の月間カンファレンス以上に多くの時間を使って発表させていただいた結果、思いを言語化することで自分の思考がクリアになること、そして違う環境にいる方たちからの意見を伺うことで視界が開けることをいつも以上に強く体験した。今回のラウンドテーブルで得たものを長期実践報告執筆に生かしていきたい。

すべては子どもの学びのために

ミドルリーダー養成コース2年/岡谷市立川岸小学校 藤森 香織

私にとって4回目の参加となったラウンドテーブル。今回もたくさんの方々との対話によって多くを学ぶことができ、充実した時間となった。

学び続ける教師集団であるために

初め、「協働探究の教員研修」と聞いて、何ぞや！？と思ったが、子どもに「主体的・対話的で深い学び」をさせるなら、教師にもそれが求められるということを知り、深く納得した。私自身、研究主任という立場になる前は、研修と聞くと「この忙しい時期に！？」とか「めんどろだなあ」と後ろ向きに思っていた。当然私の中に「主体的に学ぶ」なんて考えはなかった。それが、研修をする立場になってみると、少しでも先生方の学びになるように・・・なんて考えてみるが、先生方にとってはどうだったのだろうか。少なくとも「主体的に」学ぶ研修は今までできていないように思う。校内研修のあり方について、私は、大学院で学ばせてもらっているのだから、対話することの面白さや、大切さを毎回のカンファレンスで感じているが、こ

れを校内の他の先生方に伝えることが難しい。先生方に日々の実践や子どもの様子を語ってもらっているが、大学でのカンファレンスのようにはいかないのはなぜだろうか。一方的に話して周りはそれを聞くだけ。傾聴もないように感じる。これではただの発表。または、司会の先生だけがしゃべって終わり。「対話」ということが難しい。そこに「自分事として主体的に学ぶ姿勢」が加われば「対話」になるのだろうか。これからの研修には、自分事として主体的になれるテーマと、私には、ファシリテーターの技術が必要になってくる。先生方が話しやすい雰囲気を作り出し、話を振っていく。これは、経験を積むしかない。

一人一人を大切にすることと、自己有用感

福井県の不登校率が低いのと丸岡高校の満足度が高いのは、一人一人を大事にしているからだと感じた。丸岡高校と森田中学校の探究について、それぞれの子どもの思いや願いを大切に、そこを出発点としているから意欲を持って取り組める。そしてな

んと言っても、先生が本気になっているからだと感じた。森田中の木下先生は、この実践を語っているときとても楽しそうだった。そういうことを子どもたちが感じ取って子どもも本気になるのだと思う。さらにそこに「地域のためになること」「中学生でもできること」という自己有用感。これを得られると、これからの将来に向けて強みになると感じた。私の目の前にいる35人の小学一年生たち。大量の子どもたちに囲まれて一人一人に向き合うことがなかなかできない中で、それでも、一日一回は全員と言葉を交わす、声をかけることを目標としている。そしてそれだけでなく、「見てるからね」の合図を目で送るとか、いい姿を帰りの会で伝えるとか、一人一人を大事にするバリエーションを増やしていきたい。さらに、係活動など、クラスの役に立っているという自己有用感を子どもたちが感じられるような活動を仕組んでいきたい。

見通しを持つことで子どもの思考が狭まる

長野県の授業スタンダード（学習問題→学習課題→まとめ→振り返り）の報告をすると、毎回あまりいい反応が返ってこない。前回の2月のラウンドテーブルでも「見通しをもつことによって子どもの思考が狭まるのではないかと指摘を受けた。それもわかるのだが、特に教科の学習は、何を視点にして学んでいくかの見通しはある程度必要だと思う。学習課題があることで、子どもへの学習を理解させる上での声掛けも統一できるし、評価に関しても、学習課題が達成されたかどうかで評価ができる。そればかりにとらわれて、どうしてもこのスタンダードにあてはめなければいけないということではないが、ある程度授業の流れがあることは子どもにとっても見通しが持てて学習しやすいと思う。長野のスタンダードを取り入れつつも、それだけでない授業スタイルを模索しながら自己課題である「主体的な学び」について実践を積んでいきたい。

ラウンドテーブルに参加して

学校改革マネジメントコース2年/和田こども園 青山 憲枝

思い返せば、私のターニングポイントは、娘が高校進学して間もなく不登校になったことだ。学校が子どもにとって生きづらい場所であっていいのかという疑問から、縛りをゆるく柔軟にという意識を持ち、自身の保育の模索を始めた。集団という狭い枠の中から解き放たれた子どもたちは主張を始めた。様々な子どもたちの姿が見えてくると、それらを支えるにはどうしたら良いのかという新たな問いが生まれる。Zone Aに参加し、多様な子どもたちの学びと育ちを支えるコミュニティを培うということはどういうことかを学びたかった。

清明小学校の坪川校長先生の実践報告は、これまでの私の保育にもそのまま置き換えられた。これまでの、集団を動かす・回すといった保育の中では、逸脱する気がかり児は保育者にとってはお荷物だったし、子ども同士で学び合うのもほど遠く、集団の邪魔

をしないように個別に見ることが主流だった。しかし、清明小学校教員のコミュニティ同様、「こうでなければならぬのか」「何故、そしてそこにどんな意味があったのか」「それは、現代にも通ずることなのか」という問いを立て、話し合いを繰り返しながらこれまでの保育の当たり前を見直す。気がかりな子どもを含むクラス運営を模索しながら、保育の形が変容していく。坪川先生が大好きだと言う「一人ひとりにリスペクト」という言葉に、どんな人間にも尊重される権利があるということ、そしてそれを教育者が子どもに体現していくことが大切だと捉えた。

不登校特例校である草潤中学校の中今先生の実践報告では「学校らしくない学校」がコンセプトであり、生徒が学校の制度に合わせるのではなく、学校が一人ひとりの生徒に合わせることをめざしていた。私の娘がそうであったように、教室に入れない理由が

自分にもわからない生徒は多く存在する。「自分が取り組みたい学びを好きな場所で好きな形で」が保障されるのは、子どもの不登校を経験した親としては、多様性を受け入れるメッセージと受け取れた。

私は今、重度の知的障がいを持つダウン症の A ちゃんを含む学年を担当している。個別最適な学びを意識し、彼女の学びのペースを尊重して関わっている中で、他の子どもから「どうしてそこ（乳幼児スペース）であそんでいるの？」と問われた。どう答えるのが正解なのか。カンファレンスで担任全員が、「A ちゃんは赤ちゃんだから」という言葉に置き換えることへの抵抗感を共有できたことにほっとした。赤ちゃんではない。個別最適な学びを支える合理的配慮なのだ。しかし、「A ちゃんは特別」といった偏見を子どもたちに無意識に伝えてはいないだろうか。合理的配慮は A ちゃんにだけ必要なことではなく、それを欲している子どもがいるのならばそれをも保障すべきではないのかという視点に立つことが大事なかもしれない。

子どもがりのままの自分でいられるように、教師が子どもの良さに気づき、認め、丁寧に引き出していくことが重要だと 2 校の実践報告から学んだ。そのためには、学校の当たり前を問い直し、教職員が協働していく組織をいかに構築していくのかを考え続けなければならないのだと思う。現代において、生きづらさを抱えていない人間などいない。誰かに特別な「合理的配慮」などという言葉などなくなり、誰もが生きやすい世の中になれば良い。そのためには、様々な視点に立ち、柔軟な対応や寛容性が求められる。ひいてはそれが、新しい学校や教育のあり方のヒントになることが、Zone A の実践報告とセッションを通して理解できた。

私は、金子みすゞの「みんなちがってみんないい」という言葉が保育中によく浮かぶ。大学院で多種多様な視点で語り合う価値を見出すことができている。であるならば、子どもも同僚も、そして自分も、一人ひとりの違いを認めつつ、各々が持つ良さを最大限に発揮できるようなコミュニティ作りをリーダーとして意識していきたい。



ラウンドテーブル報告/感想

6 月のラウンドテーブルの各 Zone の参加者からの感想文を掲載しています。

Zone A

一人ひとりに寄り添う教育

玉川大学教育学部教育学科 4 年 中澤 晴香

東京都町田市にある玉川大学教育学部教育学科 4 年の中澤晴香です。今回、Zone A の学校/インクルーシブ教育に参加させていただきました。私のグループでは、教職大学院の先生や札幌の高校から来られている先生など様々な地域や他校種の先生方とお話

をさせていただきました。様々な経験談や学校の実態を聞き、自分の経験していることや学修している世界は一部にしか過ぎないということを強く実感しました。

私は幼いころから持病があり、学校に通えなかったことや通いたくても通うことができなかった経験がありました。その経験から私と同じように悩みを抱える子どもたちに寄り添い、その子に合った教育的ニーズに答えるためにはどうしたらよいかを研究したい、と思ったのが Zone A の学校/インクルーシブ教育を選択した理由です。また、近年注目されているすべての子どもが可能な限り共に学び、育つことのできる教育（インクルーシブ教育）についてより深く研究したいと思ったからです。

ラウンドテーブルの参加のきっかけは、大学の先生に今回のお話を頂き、多くの先生と出会い、様々な話を聞くことを通して、私が教育現場でできることは何かを探したいと思ったからです。さらに、現在アルバイトで放課後デイサービスと病気を抱えている子どもたちへの学習支援を行っており、一人ひとりに寄り添うとはなにか、多様な学習のサポートの仕方を学びたいと思い、参加させていただきました。

グループの話し合いでは、「一人ひとりに寄り添った教育の在り方」と「子どもたちが主体的に学ぶための取り組み」についてそれぞれの現場での様子と自分の思いについて話し合いました。

話し合いの中でも特に印象に残っていることは、自分の子どもが不登校になってしまったときの親（保護者）としての気持ちです。自分の娘が不登校に

なるとは考えてもおらず、子どもだけではなく親も辛く、不安になるとおっしゃっていました。また、頑張っていることを知ってはいるものの、「どうして学校に行かないの、学校に行きなさい」と言ってしまったと後悔をしている方もいらっしゃいました。当時は、「どうしてよいかわからない」、「どうしてこうなってしまったのか」と考えたそうです。しかし、学校の先生の働きかけにより、今では教育学部に進学し、教員を目指して勉強をしているそうです。

以上の話を聞き私は、教師の関わり方はその時だけではなく、将来にも影響を与えるということを知りました。さらに、教師の働きかけ一つで良い方向にも望ましくない方向にも子どもの人生を左右することがあることに気づき、改めて子どもたちと関わる大切さと教師としての役割・責任を実感しました。

また、初めは話についていけるか不安でしたが、先生方がプライベートのお話まで話してくださったこともあり、自分も話し合いに積極的に参加することができました。加えて、自分の話もすることができました。このことから、私は子どもたちに寄り添うためにはまずは教師が心を開くことが重要だということを知りました。

とても貴重な経験になりました。ありがとうございました。

特別支援学級、不登校特例校にみる「個別最適な学び」

株式会社ベネッセコーポレーション エリア事業推進本部 宇都宮 啓昭

これからの教育はどうなるのだろうか。児童・生徒・先生にとって、どうなることがよいのだろうかを情報収集・分析、仮説を立て、検証をおこなっている。そんな私にとって、奈須正裕教授の著書『個別最適な学びと協働的な学び』（東洋館出版社、2021）に出会ったことが、私の大きな転機となった。

不思議なことに没頭しはじめると、色々な機会、出会いに恵まれ、「実践研究 福井ラウンドテーブル

2023」で坪川先生、中今先生のお話をお伺いすることができたこと、大変感謝しています。

さて、Zone A 学校「21 世紀の学びを実践する教師の学習コミュニティを培うー多様な子どもたちの学びと育ちを支える学校・園の在り方を探るー」では、福井市清明小学校 校長 坪川 修一郎先生から「特別支援学級」でのご経験、岐阜市立草潤中学校 教諭

中今 純一先生から「不登校特例校」でのお取り組みのお話をお伺い致しました。

まず、坪川先生から、「個に応じた指導という言葉の行き過ぎにより、インクルーシブの逆、集団からの切り離しにつながらないかという不安がある」ということは、押さえておくべきことだと思います。

以下は、私なりに印象に残った言葉をまとめさせていただきました。

【これまでの教育観・子ども観をリセット】

(坪川先生) 自分のなかで、こう導いていくことは、子どもたちの成長につながるという思いもあったが、今、目の前にいる子どもがなぜ、そのような行動をするのかを、理解しようとすることに立ち戻った。背景があり、その結果、パニックになることがわかった。パニックにならないようにする方法を探してもだめだったことに気づかされた。

(中今先生) ①年間指導計画、学年ごとに3月終わりまでに、育んでいきたい力、目指したい姿から考えて作成。これは、教師の一方的な理想を押し付けることになるのではないかと、決めた枠に当てはめようとしていないかと気づかされた。また、目標から、かけ離れている生徒にとっては、ただ苦しいだけではないか。②生徒の声から、授業に参加している生徒でも、指名されたくない、ノートを覗かれないと様々

な思いがわかった。それで授業が受けられない、登校できなくなる生徒もいる。「意思表示カップ」の取組みを開始。

【安心・安全な場づくり】

(坪川先生) 子どもは、人との関わり合いのなかで育っていくと感じた。集団のなかでの個別支援、そこで教員の役割は、成長をきちんと見取ること。

(中今先生) 生徒の心身の安定を図って安心した居場所づくりに力をいれた。安心した場所、安心できる先生、仲間ができてエネルギーを充電でき、自分からやってみたく前に進もうとする姿が増えてきた。

【教員の対話の場】

(坪川先生) 大切にしたい機会・場としては、①教員同士で、定期的に子どものことを真ん中において話をする。②自然に子どものことを語る。どちらも必要。放課後、一緒に担当をしていた教員と、振り返りながら、明日のことを考えていたことが、あの時の自分の支えになっていた。

(中今先生) 登校時間が遅いため、朝の15分間、週1回、「スタッフラウンドテーブル」を実施。学校の課題や職員の教育観に関わるテーマから、職員のプライベートや楽しみに関わるテーマを組み合わせで行っている。職員間の風通しもよくなり、何か事案があったときも、連携がとりやすくなった。

Zone B

「学びの連続性」が子どもたちの未来をひらく

株式会社ベネッセコーポレーション 北陸支社 相武 貴志

この度、初めて「実践研究福井ラウンドテーブル」に参加させていただきました。福井県は初等・中等教育、高等教育が連携し、地域の教育課題に向き合い協力して実践されているイメージを持っていましたが、まさにそれを象徴する会でした。県外からも多くの先生方や企業の方が参加され、それぞれのお立場から幅広い視点で意見を交わされていました。私は

Zone Bに参加しましたが、福井県教育庁義務教育課の三崎光昭課長より教師の授業力向上に向けた取り組みやその成果について、特に小中学校のタブレット端末活用モデル事業や英語教育推進事業、不登校対策等に関する情報提供がございました。文科省の「英語教育実施状況調査」では全国1位の英語力を誇る福井県ですが、背景にあるALTの活用や小中学

校の接続を意識した英語教育の実践、結果として「話す」「書く」などの表現力が高いことなど、大変興味深いお話をいただきました。

実践事例報告では、福井県立丸岡高等学校の山内康司校長先生より「魅力ある学校づくり」について新設の「みらい共創コース」、「スポーツ探究コース」の取り組みや成果を共有いただきました。先生方の学びの機会や働き方改革に直結する「教育DXの推進」についても共有いただきましたが、探究活動の成果をアンケート分析から“見える化”している点が参考になりました。

福井市森田中学校の木下慶之先生の実践事例報告では「森田未来プロジェクト」の4年3か月の取り組みについて、プロジェクトの進化とともに生徒の成長過程を共有いただきました。日本のどの地域・学校にも学びの機会があり、「学びたい」という意欲を持った子どもたちがいる。だからこそ、地域の方々や企業とのつながりを重視し、生徒が自分の良さや強みに気付く機会を提供していきたい、というお話が印象的でした。

実践事例報告に続き、チーム別のクロスセッションが行われました。業種や立場などを超え、教育はじめ人材育成や組織マネジメントに関する意見交換を行いました。こうした機会が設定されているのも、「実践研究福井ラウンドテーブル」の価値だと実感しました。

今回初めて参加させていただき感じたことは、教育課程や授業、そして園児・児童・生徒・学生の「学び」が変わる中で「学びの連続性」をいかに実現するか、ということです。幼稚園・保育園と小学校、小学校と中学校、中学校と高校、高校と大学、それぞれの学びのGAP解消が問われています。解決方法としては、「クロスセッション」がキーワードになると考えます。例えば小中学校の先生方の交流や研究会などを通して、「学びの連続性」を実現する新たな取り組みや工夫が生まれることを期待しています。また、弊社としても他県の実践事例や調査・アセスメントデータ、人のネットワーク等を通じて各地域での活動を支援していきたいと考えています。

後生畏るべし

福井県教育総合研究所 巻下 健太郎

2回目の参加となる今回はZone B 教師教育「学び合う学校づくりのための組織・コミュニティの醸成」に参加した。「学び合う学校づくり」とは現在の取り組んでいる業務に関係するだけでなく、個人的にもこの数年、課題として考えてきた内容である。

これまでは訪問研修などで学校に出かけると、多くの場合、何か役に立つ内容を「教える」という講師の役割を求められてきた。あくまでも外部の人間で、校内のコミュニティとは無縁の立場である。しかし、研修観の転換が求められている今、学校を支援する形も変えていかなければならない。そこで、最近では何かを「教える」講師ではなく、一緒に考える同僚という立場で支援ができないか模索している。

今回、報告された実践はまさに校内でコミュニティが醸成されるプロセスが示され、実践の輪が広がる様子を目の当たりにすることが出来た。探究的な学びを視野に入れた活動をどのように同僚間で連携して行っていくのか、学校としての向かうべき方向をどのように定めていくのか、その初めの一步を知ることができたことは自分にとって大きな意味があった。

現在、学校を支援する際に心がけているのが、どうすれば学校が自走することができるのかという点に工夫を加えるということである。学校にはそれぞれの風土があり、積み重ねてきた歴史がある。その中に入って一緒にやっつけようとする、途中からの参加では伴走しながら協働することは難しい。しかし、スタート地点に共に立って向かう先を一緒になって

あれやこれやと考えることができれば、自ずと伴走しながら、学校が自走するタイミングをはかることができるのではないかと考えている。また、学校が自走し始めることに比例して、「学び合う学校」というコミュニティが成熟することは容易に想像することができる。このような学校をどんどん増やしていくことが自分の仕事だと感じている一方で、自走できる学校が増えるにつれて、この仕事が不要のものとなることに畏れと寂しさを感じる。

このような感慨をもって臨んだ2日目は、驚きに満ちたものとなった。一緒にグループ協議をした仲間の高校3年生に大きな刺激を受けたのである。大人でも尻込みしてしまうような場で自分の実践を自分の言葉で語る姿に驚いただけでなく、その課題意識の高さに感銘を受けた。

話題の中心となったのは「主体性」についてである。指導と評価の一体化について言及した上で、「主体性」の扱いについて疑問を持っているとのこと。このような「生徒」側の問い掛けに対して、受けて立つ自分たち「教員」側はどう応えたらよいのか。学習指導要領や評価にまつわる様々な情報は当然「教員」側に分がある。しかし、そのような知識を披露したとて疑問に対する回答にはならないことも事実である。そこで、必死に頭をひねって、なるべく分かりやすい言い回しを考えて、具体例を出して、あくまでも分かてもらうという点に力を入れていた。そのときは気がついていなかったが、振り返って考えてみると自分

が学校支援の際に心がけている一緒に考えるという視点が抜け落ちていたのである。

しかし、不思議なもので、議論が深まるにつれて気づいたら「生徒」側、「教員」側という立場の違いがなくなり「主体性」について語り合う仲間としての一体感が生まれていた。立場や経験、知識の違いを乗り越えて議論が深められていく過程は対話の醍醐味と言える。しかも何らかの答えを導き出す対話ではなく、自分が考えていることを伝え、他者と言葉を交わすことで生まれた新たな思いを次につなげる言葉のやり取りは自分では気がついていなかった自己を見つめ直す機会ともなった。また、最初は高校生が一人で参加しているという表面的な事象に驚いていたのが、対話を重ねることで共に語り合う仲間として向き合っていることに新鮮な驚きを感じた時間でもあった。

このような体験を得ることができることこそが、この行事がラウンドテーブルと名付けられている由縁だと実感することができた。学校現場の着実な実践や新しい取組み、次の時代を拓いていく世代の果敢な挑戦、それらの全てに畏敬の念をもちつつ、対話を通して自分自身を更新するこの機会を大切にしていきたいと感じた二日間であった。様々な人のあらゆる営みがどのように展開し結実するのか、その可能性を考えると後生畏るべしである。自分の取組もそのような可能性を秘めたものと信じ向き合い、次の機会を待ちたいと思う。

巻き込む、あるいは包み込む それとも、渦を作る

独立行政法人教職員支援機構 特別研修員 相澤 秀彦

今回、福井ラウンドテーブル Zone Bに参加して、最も印象に残ったシーンの1つは、森田中学校の木下教諭が「私は『巻き込む』というのではなく、『包み込む』というようにしたい」という発言をされたときだ（多少の言い方の違いはあったかもしれないがご容赦いただきたい）。新たに赴任した森田中学校で、最初は前任校とのギャップに苦しみながらも地道に

創造的で探究的な取組を継続し、やがて学校全体が動き出していったことに対して、協議に参加された方から「周囲をどのように巻き込んでいったのか」と、そのプロセスを問われた際に、木下教諭がこうに語られたのだと記憶している。

自分なりにその意味を解釈すると、「巻き込む」というのはどこか「自分の作る流れに引き込んでいく」という、自分中心の感じがある。しばしば「トラブルに巻き込まれた」というようなネガティブな意味で使われることもあることから、周囲の人間からすると歓迎しがたい場合もあるのかもしれない。一方、「包み込む」というと、私の中でどうしても思い起こされてしまうのは、「あんまん」とか「肉まん」とか「ロールキャベツ」だ。食いしん坊なのがバレしてしまうようで恥ずかしいが、あんまんも肉まんもロールキャベツも、包み込んでいる餡が主役である。だがしかし餡のみでは料理として成立しないし、どこか満足感のないものになってしまうだろう。このイメージが木下教諭のご発言の趣旨に適っているのか分からないが、あたらずとも遠からず、なのではないかとも思っている。

また、この発言を聞いて、「どうしてこの視点が、かつての自分にはなかったのだろうか」と後悔する出来事が思い出された。地元静岡県の中学校で研修主任をしていたときのことだ。その学校では、授業研究の理論として話合いの機能を大きく2つにまとめ、それを各教科の授業に取り入れることで、対話を通して学びを深めることができる生徒を育成しようとしていた。研究の初年度に研修主任に任命された後、校長先生から校長室に呼ばれ、研究理論に関する詳しい説明を直接伺うことになった。

私が国語科の教員で、話合いが授業の中心になることが多いからか、個人的には非常に納得のいく理論であった。おそらく国語のほとんど全ての授業に当てはめられる事柄だと痛く感心したのを覚えている。

しかし、どうやらそれが良くなかったようだった。他の先生方に熱心に話をし、「こうやって考えましょう」と解説しても、感触がひどくよくない。いくら言葉を尽くしても、首を傾げ、「どういうこと？よく分からない」という先生方に対し、「皆さんがどうして分からないのか、私の方が分からない」と思ったことさえあった。今思えば、浅はかである。分からないこ

とを互いに共有することから始めなければ、分かろうとする気も起こらないものだろう。

さらに、その後のグループセッションで一緒になった先生からは、このように言われた。「私は『包み込む』、というよりも『渦を作る』というイメージです」（これも細かな表現はうろ覚えだが）。あの時も少し質問を重ね、2つの違いは何で、どんな意図があるのか、と聞いておけばよかったと少し後悔している。

「渦を作る」と聞いて思い出すのは、鳴門海峡の渦潮と、最近とんと見なくなったラーメンに入れるナルトである。ただ、イメージとしてフィットするのは、小学生のときの夏休みに学校のプールで作った「流れるプール」だ。プールの時間の最後に、まとめ役の先生から「最後は、みんなで流れるプールを作ろう！まずは時計回りだよ」と言われると、子供たちみんなで四角いプールの中を、同じ方向に向かって歩き出す。最初は一步一步が水の抵抗で重い。それでも頑張っている、ちょうど一周したところぐらいで、ふと抵抗がかなり小さくなっていることに気付く。二周目に入ると、ほとんど抵抗がないばかりか、みんながつくった「渦」で、何もしなくても勝手に体が流れていく。ちなみに、何周かした後で反対周りもやるのがお決まりで、反対に動き出したときの最初の抵抗の大きさは、小学生の私にはかなりすごいものがあつた。そこが子供たちのいちばん盛り上がる瞬間でもあつたけれど。

「渦を作る」ときに、その主体となるものもまた、渦の中にある。もちろん、誰かが「こうしよう」と言うことは必要だと思う。だが、一度起き始めた渦を制御するのは外部の人間には難しい。渦を起こすには自らも渦中に身を置かなければならないのである。そして、大きな渦を起こし続けるには、全員が自立して歩み続けなくてはならない。その点でも、今回実践発表をしてくださった先生方の取組は、「渦を作る」プロセスではなかったか、と思っている。そういう視座を得て私は、さて、現場に戻ったらどのように動き出したら面白いだろうかと、ウズウズしている。

Zone C

ラウンドテーブルの学びとその活用

同志社中学校 生徒 遠藤 千大

今回のラウンドテーブルは私にとって3回目の経験でした。毎回様々な分野で活躍されている方々のお話を聞くことができ、とても刺激的に感じています。私が初めてラウンドテーブルに参加した時に感じたことは、「同じ中学生が同じことをテーマに考えても、視点が全く違うのだな」ということでした。そこから、自分が何かを企画する時に第三者の視点で見ってもらうことの大切さを感じました。

さて、私はいつもZone Cで「コミュニティ」をテーマにお話を聞いています。私自身、地域コミュニティの繋がりの大切さを身をもって感じるがあります。それは、京都を走る叡山電鉄と私の通う同志社中学校が産学協同行っている「八幡前駅プロジェクト」に参加しているからです。このプロジェクトでは、地域の人々と協力して「八幡前駅で地域交流を産む、持続可能な駅にする」というコンセプトで活動をしています。地域の人たちと活動することは、ラウンドテーブルで学んだ多くのアイデアや考え方を実践的に活かすことができる場だなと感じます。そして八幡前駅プロジェクトのミーティングでは、ラウンドテーブルで聞いたお話を思い出しながら意見を述

べるなど、学びの実践に向けた行動ができていると思います。やはり、学ぶだけでなく実践していくことも大切だなと思っています。

そして私がラウンドテーブルでとてもいいなと思うことは、スピーカーの方が途中で挫折した時の話や失敗談などの実体験を聞くことができることです。過去の経験に基づくお話は現実的で解像度も高いです。ゴールが明確でも、その過程には予想外のことが起きます。しかし、それらを過去に乗り越えてきた方々のお話を聞くことで大切な学びを得られると思います。過去に努力して成し遂げた方法を聞くことは、自分のこれからの活動にも活かすことができるだろうと思います。ラウンドテーブルで聞いてきたお話は、私にとって大切にしたいものです。

私はラウンドテーブルのお話がこれからの自分の活動にもどこかで必ず役立つだろうと思います。コミュニティで活動することの重要性や人とのつながりを深く理解することは、地域社会に貢献する活動を進めていく上で重要です。これからもラウンドテーブルでの経験を大切に、自分の将来の活動をよりよいものにしたいと思います。

進路選択には「偶然性」が必要。

それを実践する取り組みに感動。

金城大学 アドミッション事務専門員 米田 洋

福井ラウンドテーブルには、ご縁をいただき、2018年度から参加させていただいている。お話を伺うのは一貫して「コミュニティ」について。毎回、発表される各所、各人の取り組みに驚かされ、刺激を受

けている。今回のテーマは、「持続可能なコミュニティをコーディネートする」。コミュニティを持続可能なものにしていくためには、「地域への誇りや愛着を支え、育む」ことが必要、という副題があり、その事

例紹介として、福井の「担い手プロジェクト」の取り組みが共有された。「中学生に社会人と接点を持ってもらう」。その思いで始まった「担い手プロジェクト」は、多くの人を巻き込むために講師となる社会人の参加ハードルが低く設定されていたり、生徒に新しい出会い・発見があるよう配慮されていたりと工夫されており、なるほどと思わされたのだが、何より驚いたのはこの取り組みが2003年頃から始まっており今年で20年も続いているということだった。継続は力なりというが、個人の取り組みではなく、全体の取り組みとして継続するには、担当者間での申し送りやモチベーションの維持、代替わりした時の紆余曲折などもひっくるめて様々あったことと思われ、関係者の皆様のこれまでのご苦勞にただただ敬意を伝えたい。

私は大学で学生募集の担当をしているが、この先18歳人口が減り続けていく中で、かつ今や義務教育期間からタブレットなどをもち情報収集が容易な生徒らに向け、いかにジブンゴトになる進路選択を勧めるかに苦慮している。近頃の生徒たちを見ていると、一見、自由であるかのような進路選択も、実はたまたま目にしたものを深耕する傾向が強いというこ

とに気づかされる。特にコロナ禍では、本人の直接行動以外で進路選択に結びつくようなきっかけが非常に乏しかったという話をよく耳にする。生徒たちは今あるもの、今目にするもの、今耳にするものしか、自分の将来の選択肢を見つけられていないのが学生募集の課題になっている。その観点から言えば、「担い手プロジェクト」は、生徒自身が望むと望まざるとに関わらず、将来の進路選択、職業選択の一つになり得る仕事についての話を聞けることはとても素晴らしいといえる。この「偶然性」による進路選択、職業選択は、これからの学生募集のキーワードになるのではないか、そんな風にも思う。

福井はこれから、北陸新幹線延伸により、インバウンド需要など、これまで以上に環境が激変するものと思う。人口減少、人口流出により、地域の各業種業界においても、生成AIを使う機会が増えていくことと思う。その時、この20年間に及ぶ「担い手プロジェクト」の成果がきっと各地域地域で花開くのではないか。今回のラウンドテーブルでは、そんなことを考える機会になった。改めて、関係者の皆様、発表者の皆さまとのご縁に感謝である。

Zone D: International

A Culture of Reflection and Implementation of Lesson Study

Teacher Training student **Kandy Andrea Perez Rodriguez**

Since I arrived, I noticed that the word **“Reflection”** has a deeper meaning in the Japanese educational system. It is about students becoming aware of their own thinking processes and being able to make those transparent to others.

Based on this experience, it is the first time I shared my thoughts and ideas with different professors, but the most valuable experience I got was listening to others' points of view, problems, and specific situations. Now the

Roundtable session has a new meaning for me; it is a space in which a discussion takes place and all group members will have an intervention and the chance to ask something. The groups may vary depending on the distribution of that day. That makes things more interesting because everyone has a different perspective or mindset, and having the opportunity to talk with teachers, both who are new in the educational world and are attentive and open to suggestions or new ideas, and experienced teachers, who

are talking about their concerns and challenges, creates an empathetic environment.

The discussion is to support teachers in understanding and assessing student thinking, but it is also a time in which you can find solutions to problematical situations. As a foreign teacher, I am in the process of learning this new way so every time I experienced something new.

During this past Roundtable Zone D, I had the chance to participate as a Facilitator. I can't say it was easy for me, but it was a challenge to be aware of what I had to do. I received a brief explanation, but I just tried to keep myself focused and tried to pay attention to all the details from the speakers who were talking about their experience applying lesson study in their country. It was a stressful role but at the same time a challenging one in which I focused my energy on being attentive and active.

In regards to the speakers, they shared the difficulties of being an agent of change for other teachers and how motivated they felt about their experience in Japan, specifically about lesson study and the impact on their lives.

Creating a culture of reflection is a process that has been implemented and they are currently working on spreading their voice to others and convincing them that student-centered education will have a positive future for their community. Changes are not easy to implement, but at the same time, changes are the only constant in our lives. That was said by one of the speakers who was concerned about many situations, but despite everything, they remain optimistic and will continue to strive to continue with the implementation process of something they know will bring progress to their country.

Reflection on the Roundtable Presentation about Lesson Study Implementation at Mvunguti Community Day on Secondary school (June 17)

Teacher Training student **Sandar Htun**

In considering lesson plan, the teacher needs to identify general and specific goals related with the topic within on period. Recalling previous knowledge, brainstorming, and exploring concepts must develop before moving on next concept. Planning pre and post lessons in the sequence, carefully considering student groupings, conducting exploratory lessons are involved in designing lesson study. Teachers' creative activities adjust student learning comfortable to be implemented the purpose of the lesson study. The more the students are involved in classroom learning, the more the students feel free in lesson study. In this situation, the role of teachers become facilitator to classroom learning atmosphere and the teacher only investigate what happening in the classroom.

Effective lesson plan reflects the teacher to be allowed to be as autonomous as possible during the lessons. One of the advantages of effective lesson study basically involves teachers who collaboratively plan, deliver and critique a lesson. The purpose of learning becomes to monitor and reflect on learner's process of learning in order to improve future learning. Students are given to enter the classroom to learn intended concepts through inquiry but the teachers need to design the material available based on locally resources. Not only the teacher but also the students need to find the related solution within and at the end of the lesson. This kind of learning seems to be independent learning approaching to learner-centred approach. During the reflection session, the teacher allows student

opportunities to accept divergent thinking. If the students did not catch the information what teacher mentioned, this is the time for teachers to conclude the essential knowledge prescribed in the textbook. Feedback is also the necessary key in lesson distribution.

I have also realized that there is another considering fact, inviting workmates to students learning atmosphere, to be effective lesson study. All teachers in the school cooperate to assess what the classroom teacher is trying to distribute some aspects of lesson study among students. The observers can find out the drawbacks of coordinators' teaching and training to students appeared in the classroom. By inviting colleagues in demonstrative classroom learning, the observers can get new teaching strategies for next lesson plan, monitor whether all participants in the classroom are interested or boring on teacher created

lesson plan, know the information gap between teaching service, reflect individual teaching learning situation and obtain different teaching approach on one topic.

Teaching is the professional learning for teachers and learning never stops even as we grow older. Life long learning helps us know new teaching approaches to particular. He is the teacher who are training to students in his class, but, on the other hand he behaves as learning when he goes to another classroom and watches someone else teaches. From this point of view, I can also understand that the teacher stands both side of teaching and learning in the same time until he gives up his professional job. Thus the role of observation and implementation of lesson are important factors in designing lesson study for one particular topic.

Strengthening Professional Development in the Philippines: Challenges and Promises

Department of Education Philippines Michael Wilson I. Rosero

It was a great opportunity to be able to join and present again during the Fukui Roundtable Discussions. I was grateful to the staff of the Department of Professional Development of Teachers of the University of Fukui for allowing me to share my experiences more than a year after I left Fukui, Japan.

Upon receiving their invitation and accepting it, however, I almost regretted my decision. I realized that my current line of work is different from when I was still part of the University. Back then, I was involved in the professional development of teachers, as a project officer of the Philippine Department of Education (DepEd). I was then tasked to operationalize the Results-based Management System (RPMS), which covers performance management, performance appraisal, and professional development of teachers in the Philippines.

Although I failed to return to DepEd as planned, I was able to work again for the Philippine National Research Center for Teacher Quality from May 2022 to November 2022. I was once again in charge of the RPMS and as we revised the RPMS tools and processes, I was able to introduce the concepts of reflective practice inquiry and practice. Through our discussions, we were able to emphasize the role of classroom observation and feedback in the improvement of teachers' practice.

My career path changed again in November 2022 when I transferred to the Curriculum and Teaching Strand of DepEd. Currently, I am more involved in the development, implementation and delivery of the basic education curriculum. So, when I was invited to present updates on my practice, my successes, and my challenges, I realized that I had nothing to say about lesson study and the

professional development of teachers.

Fortunately, the day before the presentation, the staff of the National Educators Academy of the Philippines (NEAP), the agency in charge of the professional development of teachers and school leaders, approached me and asked if I could help them review the professional development policy of DepEd.

So, during the Fukui Roundtable discussions, I shared the status of the professional development of teachers in the Philippines, amidst the ongoing transformation of the agency in charge of the professional development of teachers and school leaders and the impact of the many reform initiatives on teacher quality in the past decade. I also shared the plans of the NEAP in improving the policy on the professional development of teachers, following our discussions on how to apply the lessons I learned from Fukui and other countries. Among these are:

- Upgrading classroom observation practices of observers
- Integrating reflective practices and processes in the Results-based Performance Management System
- Introducing reflective practice record
- Creating a support structure for reflective practice by strengthening communities of practices
- Cultivating a culture of research in schools through learning action cells (LAC) and in-service training (INSET)
- Strengthening LAC and INSET programs; integrating and contextualizing the LS cycle into the PD systems
- Allowing flexibility for teachers in implementing the Curriculum
- Developing a comprehensive policy on teacher professional development

During the Fukui roundtable, another presenter from Malawi, Ms. Chantya Bertha, shared her experiences and challenges of implementing the lesson study as a teacher. As I haven't had any experience in implementing lesson study, Ms. Bertha's presentation gave me a concrete view of how lesson study can be implemented in schools. Studies, including those that introduced lesson study in the Philippines, have shown the benefits of lesson study. Contextualizing it to another country and integrating it into the existing practices and processes, however, is another story.

Ms. Bertha shared that she started implementing lesson study informally as she encountered the challenge of convincing her administrators to gather the school staff to be trained formally. Teachers, students, and administrators saw the advantages of conducting lesson study and gradually embraced it and integrated it into their system and practice.

Ms. Bertha's narrative complemented my perspective as someone who is involved in policymaking. In the context of the Philippines, as I shared during the roundtable, we are planning to review the existing policies and practices of collaborative and reflective teaching and learning and strengthen them through policies. For instance, lesson study has been recognized by schools and teachers as one of the effective professional development models, but it is not widely practiced. Informed by various studies, local and international (such as Ms. Bertha's), we will be able to think of a way to integrate the cycles and processes of lesson study into our in-school professional development models. We are also thinking of collaborating with Ms. Bertha and her schools, through the DPDT and University of Fukui, as we move forward.

Being part of the Fukui roundtable once again reminded me of the beauty and significance of reflecting on your practice and sharing it with others. Such a process allows you to see things in a different light.

Reflecting on Participants in Roundtable Zone D

The University of Fukui, Specially appointed assistant professor **Tjipto William**

The Roundtable Zone D is always an impressive group, attracting members from countries all over the world. Thanks to their attendance, participants of all backgrounds can gain new perspectives from colleagues challenging the status quo in education and implementing Japanese-style Lesson Study in their respective countries. As a participant several times over myself, I found that I had more to discover and share in a different role this time around.

For the Symposium, we invited two speakers from very different situations and perspectives, Chanya Bertha from Malawi and Michael Rosero from the Philippines, to share a little about their efforts to implement Lesson Study. The International team decided on these two speakers because of their unique perspectives in their areas as well as converse points of Lesson Study implementation. Both of them had studied at the University of Fukui and understand not only issues at hand, but how the Lesson Study approach can improve their situation amongst stakeholders, but most importantly with the students. In Malawi, Lesson Study is still in its early stages, so Chanya's presentation focused on her personal challenges in starting it within her school and drawing upon her colleagues for help. In the discussions afterward, many listeners praised Chanya's presentation as easy to understand and very moving from their view, since many of them also were in the infancy of implementation. Michael's presentation was also equally impressive, but in a broader view, coming from the viewpoint of a curriculum management designer working in the government.

For the second session of the Roundtable discussion, we broke into smaller groups. Although each group was scheduled to have two speakers, there were inevitable connection issues from members overseas, so it is something we have to think about as organizers. Thankfully, Lindiwe Mokotjo could join us in our

discussion and she had much to say. I am happy to know her and her experiences very well, having welcomed her here at the University of Fukui during the same JICA-funded program as Chanya, but I also saw her situation firsthand in her home country of South Africa. She made a detailed presentation about her experiences around Lesson Study in Japan, recognizing some important revelations she observed through her time here and during our visit to South Africa. But most importantly, she talked about the future developments at her NIE higher education schools, alongside the University of Pretoria and the University of Fukui.

Due to our issues with the listeners dropping in and out during the presentation and small groups, our discussion was a bit mixed with some commenters missing out important points and perhaps not flowing as smoothly overall as it could. Nonetheless, our group found her experience and the previous symposiasts' experiences enlightening. They understood that many things can be achieved through effort and approaching things differently. Even though I knew their stories well, it was no less important to understand their point of view in regard to the Japanese Lesson Study, how it is implemented here, and to consider how it can be adapted to each of their situations.

For my own personal growth as a teacher and one of the Zone D organizers, it was especially important for me to encourage the University of Fukui international student members as Facilitators and assist them in taking the next step in their educational experience here in Japan. Despite my inadequacies in giving them direction and their relative inexperience with group discussion facilitation, I truly felt their professional growth within the short hour. At the beginning of the hour, they were unsure of how to start the meeting, simply greeting everyone and moving on to the presenters briskly. Despite connection issues in our group,

they did their best to ask questions and spur further discussion. At the end of the Roundtable, they exasperated their exhaustion, excitedly chastising me for not giving them more directions, but it was in those comments I could see their joy and confidence in accomplishing that hurdle in their short time here. I had spent years on that opposite side of the table and now I can start to understand how I can support others.

With the Roundtable continuing again next February, it is important for me to think about what I can do to improve the situation in the future. As mentioned, a major issue is the possibility of members dropping out, so I had considered either having more presenters for each group or having all participants ready to talk about some points, but

at the same time, another professor said that might make discussions shallower. We can also reach out to more participants, rather than only the African groups we worked with most recently, such as inviting former University of Fukui international students or other local ALTs into the groups to vary the content and scope of the discussion.

Even though I had been in a similar position earlier this year in February, I noticed the change in myself and my processes over the few short months. In reflecting on the troubles and growth of the participants and international students, I could see how I have the same challenges, in a different context, much like how we as teachers grow by observing our students in Lesson Study.

Zone E

ラウンドテーブルで学んだこと

福井県立武生東高等学校 高橋 彩芭

私は今回ラウンドテーブルに参加して異なる価値観を持つ人と時間をかけて深く話し合うことで自分の視野が広がるということを学びました。

同じグループで話し合うメンバーは、学校も先生や生徒という立場も違いました。だから様々な角度から「この仲間とのこれまで・これからの関係」について話し合うことが出来ました。特に印象に残ったのが立場にとらわれず、一人の人として議論できたことです。

普段なら「生徒と先生」という立場が強いので深く議論しづらいこともありますが、今回は一人の参加者として向き合うことが出来ました。全員で熱く議論し合うことができてとても楽しかったです。また自分の考えを言葉にすることで、これまでの活動で築いたパートナーとの関係の大切さに気がつくことが出来ました。今回議論した、様々な人との「これからの関係」についてこれからも考え続けていきたいです。そして探求活動に活かしていきたいです。

子どもに学ぶ、学び合う

福島大学 人間発達文化学類 黒はばき 颯

この度は木村優先生にお招きいただき、福島から参加させていただきました。貴重な学びの機会を頂

き、ありがとうございました。初めてラウンドテーブルに参加し、多くの新しい学び、気づきを得ることが

できました。

一日目は、ポスターセッションをはじめとしてアクティブに実践し、学び続けている教師の姿に感銘を受けました。特にお話を聞いた Pauline 先生の、学級経営についての実践は、「弱点を強みにすること」というコンセプトや、「デザイン・信頼・コミュニティ」という視点など、自身の実践に照らして共感できるところがあるからこそ、実際の学級における、より具体的で鮮明なねらいに基づく実践としてお聞きすることができ、多くの事に気づくことができました。特に、「Agency と Co-Agency」という視点を新たに得ることができたことは、私自身これからの教育実践にとってのヒントになるものだと感じており、どのように援用し、展開しようか、わくわくしています。

また、福島から、こちらのラウンドテーブルに参加してとても印象的だったことは、この学びの機会に子どもが参画しているということです。教師や大人たちは子どもの姿から学ぼうとし、また子どもたち同士も、参加することを通して学び合う姿が、とても素敵だと感じました。私は、ポスターセッションでは主に中学生の発表を聞きました。発表の内容は、中学生らしいものから高度な調査や実践を伴うものまでさまざまでしたが、それ以上に印象的だったことは、子どもたち自身の姿です。それぞれのテーマに対して、ユニークな視点から、しかし基礎的な探究の過程をしっかりと踏まえた実践をしており、これからさらに積み重なり、発展していくであろう「探究的な見

方・考え方」を私は感じ取ることができました。発表に際しても、何とかして伝えようとする姿勢や、聞き手としては気兼ねなく質問をする姿が印象的で、子どもたちが学びに向かおうとし、その機会が開けていることがとても素敵なことだと思いました。

二日目はクロスセッションにて、報告者として参加しました。私は、大学のサークル活動の一環として実践している、「まほろば学習室」という活動を紹介するとともに、その成果と課題を、自身の視点から報告しました。報告の準備をするなかで、今まで何となく持っていた課題意識を鮮明にし、単なるサークル活動から、学びへ向かう実践として位置付けられたと感じています。報告すること、あるいは報告の準備をすること自体に意味があるのだなと気づき、「語る」ことの意義を感じることができました。クロスセッションに際しては、そのような活動を参加者の皆さんが、そこから学ぼうとしたり、ともに課題を考えたりしようとしてくださった姿勢がうれしく、より挑戦したいと思えるような場でした。クロスセッションを経て新たに得られた気づきを踏まえて実践を深め、また報告ができればと思っています。

最後に、このラウンドテーブルの体制自体が、子どもに学ぶということや、学び合うという理念を体現する、とても素敵な学び合いの場となっており、多くを学べると思いました。機会がありましたら、ぜひまた参加させていただきたいです。

「探究」してみませんか？

独立行政法人教職員支援機構 特別研修員 大石 裕千

今回、私が Zone E に参加した理由は、大きなテーマが「探究」だったからである。私は現在、高知県教育センターからの派遣職員として、茨城県にある教職員支援機構で働いている。教育センターでの私の役割は、研修の企画立案・運営等の機構での実務の経験を生かしながら、教員のための研修を想定し、「新

たな教師の学び」の趣旨・ノウハウを教員研修等に反映させていくことである。そこで重要なのが「探究型の教師の学び」等の「新たな教師の学び」の姿を研修の内容や方法に位置づけることである。今年度、教職員支援機構で始まったコア研修は、以下のことを目的としている。「自ら問いを立て、実践の振り返りや

対話、知識の習得を重ねながら、実践を展開することで、自他の価値観を捉え直し、新たな問いや実践に向かう」持続的な探究プロセスを提供すること。このプロセスを通して、課題を探究する力や、探究的な学びをデザインし、マネジメントする力といった、教師にとって中核的(コア)に求められている力を高めること。私は派遣期間を通して、こうした「探究」を核にした研修について理解を深め、高知県教育センターでも大切にしていきたいと考えている。

Zone E がいよいよ始まった。参加者は、中学生から大学生、そして、社会人までといった方々で世代や立場は多様であった。簡単に、Zone E の流れを説明すると大きく3つである。最初に、桃太郎一行を編制する。参加者には桃太郎に出でてくるキャラクターが印刷された紙が受付で1枚渡される、最初は自由に座っていたのだが、司会の合図で誰もが知っているであろう、5人から6人で桃太郎一行となるようにグループをつくり、自己紹介を行った。次に、トークショーを参観する。バラエティー番組を模した形で3つのテーマをもとにお題トークを行った。高校生と大学生がユーモアも交えながら、惜し気もなく自分を語り、それに対しコメンテーター役の方々が、自身の経験を振り返り、やはりユーモアを交えて語った。最後にみんなでトークショーをする。グループの中に一人ずつ配置されているファシリテーターが、先ほどとは違い、かなり控えめなコメンテーター役となり、個々の語りに「問い」を織り込み、本質的なパートナーシップのあり方・あり様を参加者の自分事となるようにデザインしていく。

私のグループは、偶然にも中学生、高校生、大学生(ファシリテーター)、大学院生、40代、50代の幅広い世代の6人で構成されていた。

多様な他者とのかかわりの中で一人一人の実践と経験から学び合い、聴き手によって支えられながら互いに自身の物語を語り合い、そして、語ることによ

って自分自身を振り返るという体験ができた。終えてみて、2時間近く人と語り合うことは、一冊の本を読み終えた時の感覚に似ている感じがした。それは、頭の中が整理されるとともに考えが補完されていくような感覚である。何よりも、参加者一人一人の学びや気づきが保障されており、語る内容が本質的な「問い」になればなるほど語る内容は、他者から自分へと主語が変化していく。それが世代関係なく一様であったことに驚かされた。今回、特に同じグループの中学生の姿が印象的であった。ファシリテーターから、「問い」を投げかけられると、すぐには反応できないが、数秒、ときには10秒近く考えた後、顔を真っ赤にししながら、自分の言葉でささやくように一生懸命に語っていた。他のメンバーの温かい眼差しと、待つ、待ち切るといった姿勢が彼女の姿につながったのではないかと私自身は考えている。人の変容が促され、育つ瞬間には協働的な学びやコミュニケーションが取れる場、対話ができる環境といったものが大切になってくるのではないだろうか。そして、他者との対話の前後には自分との対話が偶然的ではなく必然的に起こっているのではないだろうか。このような学びのきっかけとなるのが、「探究」であると私は考えている。

帰路につきながら、「探究とは何か」という結論のない本質的な「問い」に思いを馳せた。「探究とは、本来、生まれながらにヒトが持ち備えている学び方・学びのあり方そのもののかな」と。

変化の激しいこれからの時代を生きる子供たちには、自ら問いを立て、課題を探究し、他者と協働しながら人生を切り拓いていく力が求められている。教師にはこのような子供の力を引き出せるよう、子供を主語とした探究的な学びを展開することが求められている。私自身が、探究的な学びについて考え続け、模索し続けることを決意表明し結びとしたい。

学びと教えのあたらしいパートナーシップ

岐阜市立加納中学校 教諭 今井 良昌

Zone E 探究に参加したのは、「子どもたち・若者たちと大人たちが世代を超えて探究」するというフレーズに心惹かれたからだ。中学生から大人まで、さまざまな世代が交流することで、何が生まれるのか、きっと刺激的な時間になると感じた。

まずは、ポスターセッション。あわら市金津中学校の「あわら考古学」を特に興味深く見させてもらった。中学校教員として、探究をしている中学生に興味をもったからである。「地域のよさを知らない」、「歴史を知らない」そんな自分たちを見つめ、地域のよさを探究しながらこれからのあわら市について構想していた。観光、交通、飲食業、そして福祉の分野も含めて、今後のあわら市の産業を振興していきたいという思いが伝わってきた。自然環境や歴史・文化といった観光資源を生かそうとしていることは社会科の学びともつながっていた。何より、質問をした時の受け答えも、わかることもわからないことも堂々と受け答えしていたことも印象的だった。

次のM. T. R. では、さらに刺激的であった。トークショーでは、パネリストの中・高校生の語りから、自分の今までの学びがあったからこそ今の自分があること、それが確固たるアイデンティティーになっていることが伝わってきた。

パネリストの話を聞いていると、学び手とサポートする側が、心理的な安全面や居場所を確保し合いながら対等な関係を築いていることや、学びに対しての同じ熱量を感じることができる良い距離感を築きあげることが大切であると感じた。また、その探究を通して、学びの場が広がり、人と人がつながること、プロジェクトだけではない人とのつながりが生まれ

るというよさを再認識した。

トークショーののちには、福井高専、鯖江高校の福井の高校生に加え、東京大附属高の高校生、福井大学教育学部の学生、N I T Sで研修をしている山梨県の高校教諭という多種多様なメンバーとラウンドテーブルで交流することとなった。世代や立場がさまざまなメンバーで交流することを通して、自分の凝り固まった頭や考え方も幾分ほぐれた気がする。岐阜の中学校での経験だけでは触れることができなかった考えに触れることができた。特に「素敵なパートナーシップを一言で表現する」というテーマにおいて、「好奇心のベクトル」が同じという表現には感銘を受けた。プロジェクト学習において、仲間と議論が止まらなくなった経験からの言葉であった。その言葉に相当な熱量をもって探究に取り組み、対話や議論を繰り返してプロジェクトを進めてきた経験が詰まっていたことが伝わってきた。この交流においては、ここで出会った若者のまっすぐで、それでいて力強く未来を見据えて学びを続けていこうという姿に感動した。

今回の経験を通して、仲間同士、子どもと大人、生徒と教師、学びにかかわる人が、同じ熱量をもって、学びを成立させようと本気でかかわることこそが、これからの学びのパートナーシップであると感じた。そういう関係のもと学んできた今回出会った若者の素敵な姿が、これからの教育が目指すべき姿だと感じた。岐阜の教育のよさに、今回感じた福井のよさをうまく取り入れ、未来に生きる輝く若者を育てていきたい。

ラウンドテーブル

出会いのなかで得た多くの学び

札幌新陽高等学校 田渕 久倫

今回参加した実践研究福井ラウンドテーブル 2023 Summer sessions は、まさにテーマのとおり、高い志のもと「実践」し、次なる進化を求め「省察」する人たちが集っていた。同僚からの誘いに右も左もわからず飛び込んだが、想像を遥かに超えた出会いがあり、そのなかで多くの学びを得ることができた。

私が大切にしている言葉に「もっと失敗しろ、もっと恥をかけ、もっと一流に触れろ」というものがある。今回出会った同志たちと比較すると、まだまだ恥も失敗も足りないかもしれないが、私自身も初任から絶えず実践は重ねてきたし、そのたびに多くのことを経験してきた。挫折の経験も数えきれず、その度に仲間たちに支えられ、立ち上がって進んできた。

ただ、一流に触れるということは、年を重ねるごとに、重要性の認識が増してきた気がする。実践という言葉だけに焦点を当てれば、自身の職場や所属するコミュニティの中で積み重ねることも可能である。しかし、物事には際限のない高みがあり、それらを目指すには、多くの一流と出会い、その経験に触れる機会が必要である。それは職場と家の往復だけでは絶対に得ることができないものだと考えている。だからこそ、今回のような機会は貴重であり、そのなかで得た出会いは私に多くの学びを与えてくれた。

今回の出会った人たちは、大小や種類の違いはあれど、多くの実践と省察を繰り返してきた人たちだった。それゆえ様々な課題に直面し、失敗や挫折を経験してきたのだ。そして、そこで放棄や断念という選択をせず、それを転換点とし、多くの成長を遂げてき

た人たちなのだろうと、対話の中でその背景を垣間みることができた。自らの所属やコミュニティを飛び出し、このような一流の実践者たちと出会い、対話することは、省察に継続性や深みを与え、新たな実践を生み出したり、その実践を次の段階へと昇華させたりすることにつながる。今回もその出会いや学びを得て、自らの所属先に戻ったとき、現状に満足せずに実践をさらに更新し、省察にもっと深みを出す必要があると考えさせられた。この思いを持ち帰ることができたということだけで、このラウンドテーブルがなにものにも変え難い貴重な場所だということがわかる。

出会いの重要性を教えてくれたのは、大人たちだけではない。このラウンドテーブルでは、小・中・高校生もたくさん参加しており、そんな若者たちとの対話の場では、彼ら/彼女らが心の叫びをぶつけてくれた。それらを直に受け取ったとき、「立ち止まっている場合じゃない」と胸が熱くなった。

実践や省察を繰り返している人たちは、日々多忙であり、学びを得るためとはいえ、所属先以外の場所に足を運ぶことは容易ではない。しかし、今回集った実践者たちは、学びに貪欲であり、多忙の合間を縫ってこのラウンドテーブルに参加することの意義を理解している。私も今回だけで、この場所に時間や労力を投資してでも参加する価値があることに気付かされた。この事実を一人でも多くの人たちに知ってもらい、それによりさらに多くの実践者と出会えることを願っている。

等身大の自分を見つめる

北信教育事務所 指導主事 清水 和

指導主事になって2年目。教師として学校に勤務していた時は「自分には絶対できない」と思っていた立場に今なっている。「こんな自分に何ができるのだろうか」と今でも思うことがある。1年目は「指導主事とはどうあるべきか」ということばかりに気を取られ、知識も経験も自信もない自分を「指導主事として恥ずかしくないように」と必死で取り繕っていた。訪問先での授業研究会では「何をどのような視点で伝えれば指導主事らしくなるのか」「指導主事としてどのように立ち振る舞うことが正解か」ということばかり考えていた。そんな自分では、現場の先生方の願いや悩みに十分に応えることはできていなかったと思う。

2年目の学校訪問が始まった。昨年度の反省を生かし、現場の先生方の声を聴くことを意識してきた。すると、先生方の「子供が主体的に取り組む授業をしたい」という熱い想いや「どうすれば子供たちがいきいきと取り組む授業ができるのだろう」という悩みなどを聴くことができるようになった。次第に「このような先生方の思いに応えたい、悩まれている先生方の力になりたい」と思うようになっていった。これまでは「自分にできることは何か」ということばかり考えていたが、大切なのは「自分がやりたいことは何か」なのではないか。何となく感じてはいたものの、自分を立ち止まらせ、改めてこのようなことを考えさせてくれたのは、今回参加させていただいたラウンドテーブルである。

Cross session で同じグループになったストレートマスターの学生はインター先の学校で、いわゆる「学級経営が上手な先生」がどのような授業をしているのか、子供たちにどのような声がけをしている

のか、徹底的に記録を取るということを実践していた。自分の「問い」を解決するために、とことん観察し、それを自分なりの視点で分析し、謙虚に学ぼうとする姿勢が輝いて見えた。

また、カリタス小学校の先生からは総合的な学習の時間の実践について伺った。なかなか成果が現れず活動が停滞してしまっても、教師がお膳立てすることなく、子供たちが試行錯誤しながら取り組んでいく。まさに「子供たちがつくる総合的な学習の時間」。子供たちは、たとえ成果が表れていなかったとしても、自分たちの取組の過程に意味や価値を見いだしていた。教師が材の価値を見だし、子供の持つ力を信じて任せてきたからこそその姿である。

実践について語り合うことを通して、今自分が「やりたい」と思うことをとことんやってみたいと強く思うようになった。私は指導主事として、現場の先生方が子供たちと楽しく授業ができるように、そして子供たちがいきいきと学び、幸せな未来を築いていける力を育んでいくために、子供や先生方に寄り添って支援していきたい。そのためには、「自分が」ではなく、「先生が」「子供が」何を願っているのか、何を求めているのか、その声をしっかりと聴き、その声に少しでも応えられる自分でありたいと思う。

ラウンドテーブルは、自分の肩書や立場に囚われず、等身大の自分で語り合うことができる場であると感じた。その中で、今まで見ようとしてこなかった、本当の自分の思いに気付くことで、これからの実践への活力が湧いてくる気がした。このような貴重な機会に参加させていただいたことに感謝し、明日からまた、等身大の自分で一步を踏み出していきたい。



事務連絡

オンライン・オープンキャンパスのお知らせ

(授業研究・教職専門性開発コースのみ)

教職への扉をひらく 長期インターンシップ

福井大学連合教職大学院

授業研究・教職専門性開発コース
オープンキャンパス（オンライン）

実践力ある 21 世紀の教師を育てる
教職大学院の先端モデル

2023 年 **8 月 17 日(木)** 13:00～15:00

参加をご希望の方は「オープンキャンパス希望」と件名にお書き添えの上
dpdtfukui@yahoo.co.jp までご連絡ください



学校で 1 年間週 3 日 実践経験を重ねる。＜インターンシップ＞

総体を学ぶ 授業づくり・生活指導をはじめ教職の総体を学ぶ
仲間と学ぶ 仲間や先輩と語り合う週間カンファレンス
充実した支援 学校の現職教師と大学院の教員がチームで支えます

実践と理論のサイクルをつくる。＜実践研究＞

学校での経験をとらえ返し、検討し、問い進める実践研究

教職への歩みを支える。＜財政支援の充実＞

一般の奨学金・学費免除等に加えて、福井大学連合教職大学院独自の
スカラシップ（奨学金）をはじめとする就学支援制度を進めています

◆当日の予定

13:00 全体説明

14:00 現役院生との
座談会

連絡先

福井大学連合教職開発研究科（連合教職大学院）
〒910-8507 福井県福井市文京 3 丁目 9-1
Tel. & Fax. 0776-27-9872



入試情報の詳細

講座番号19-1、19-2
福井ライフ・アカデミー連携

受講料無料

2023年度福井大学公開講座

福井型教育を世界へ！ ～地域発の国際協力最前線～

- ① 2023年10月 9日(月・祝)10:00～11:30
福井大学文京キャンパス 総合研究棟V 1階 11講義室
- ② 2023年10月15日(日) 10:00～11:30
福井大学文京キャンパス アカデミーホール

※①と②の内容は同じです。ご都合の良い日にお申し込みください。

CO2の削減など地球規模課題が問題となる中、世界の8割を占める開発途上国では質の高い教育が求められています。その解決に大きな役割を果たしている福井の教育。一体どんなことなのか？その活動を紹介します。



対象 中学生以上
定員 各回先着30名
講師 福井大学教育学部 准教授 高田 宏仁、高阪 将人
申込期間 ① 9月15日(金)AM9:00～10月1日(日)
② 9月22日(金)AM9:00～10月8日(日)
申込方法 公開講座ホームページ・郵送・FAXのいずれかの方法
でお申し込みください。



公開講座HP

国立大学法人 福井大学
地域創生推進本部

教育学部・教職大学院の教員による公開講座のご案内

講座番号 19-1、19-2 定員:先着30名(各回)

**福井型教育を世界へ！
～地域発の国際協力最前線～**

開催日 ①10/9(月・祝)、②10/15(日)
各回10:00～11:30 ※①と②は同じ内容です。

講師 高田 宏仁／教育学部 教師教育講座 准教授
高阪 将人／教育学部 教師教育講座 准教授

対象 中学生以上

申込期間 ①9/15(金) am9:00～10/1(日)
②9/22(金) am9:00～10/8(日)

講座番号 20 定員:先着25名

**福井県の「郷土数学」
～算額と和算活動を中心にして～**

開催日 10/15(日) 10:00～12:00

講師 風間 寛司／教育学部 教師教育講座 准教授
藤田 彩／鯖江市教育委員会文化課 学芸員

対象 一般

申込期間 9/22(金) am9:00～10/8(日)

講座番号 21 定員:先着50名

**心理学講座「思春期と学業について
考える—心と体と将来と—」**

開催日 10/22(日) 13:45～15:15

講師 大西 将史／教育学部 発達科学講座 准教授
望月 直人／大阪大学キャンパスライフ健康支援・
相談センター 准教授

対象 小学生から高校生までの子どもの保護者・祖父母など

申込期間 9/29(金) am9:00～10/15(日)

詳しくは
「福井大学公開講座」
ホームページからご覧ください



<https://chiiki.ad.u-fukui.ac.jp/course/>



【開催告知】

福大 未来キャンパス 2023

- 中高生のための未来発見講座 -

大学ってどんなところ？
中高生
対象
ちやんとわかる217307

会場

福井大学文京キャンパス
福井市文京3丁目9番1号

10月22日(日)
10:00～16:00

一足早く大学生を体験してみませんか？ 中高生のための授業体験講座に参加すると、自分のやりたいことが見えてくるかも。さあ、あなたの **未来** を探しに行こう！

詳しくは公開講座HPにて9月上旬公開予定

Newsletter は、教職大学院に関わる皆様の協力で作られています。
修了生の皆様もご自身の実践や近況について投稿してみませんか。
関心がある方は、dpdtfukui_nl@yahoo.co.jp までご連絡ください。

Schedule

10/21 Sat.	月間カンファレンス A 日程、	10/28 Sat.	同 B 日程
11/18 Sat.	月間カンファレンス A 日程、	11/25 Sat.	同 B 日程 / 東京ラウンドテーブル
12/23-25	冬期集中 a 日程、	1/5-7	同 b 日程
1/31	長期実践研究報告締め切り		
2/4 Sun.	長期実践研究報告会		
2/17,18	実践研究 福井ラウンドテーブル 2024 Spring Sessions		
3/14	運営協議会		

【編集後記】夏の集中講座が開催されていますが、前期最後のニュースレターをお届けします。今回は、今春入学された学校改革マネジメントコースの皆さんの自己紹介文が掲載されています。「大学院で学ぶことで感じている自分のわくわく感が、勤務校の職員にも感じることができそうな、職員間の学びにつながるように実践を積み重ねていきたいです」、「この教職大学院が私の学校のエージェンシーになってくださり、困ったことの解決の糸口を与えてくれると感じています」といった文面からも、本学での学びに対する期待感がひしひしと伝わってきます。熱い情熱と高い志を持った院生の皆さんからのパワーを頂いて、この猛暑を乗り切っていきましょう。(I.O)

教職大学院 Newsletter **No.174**

2023.8.23 公開版発行

編集・発行・印刷
福井大学大学院 福井大学・
奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学
連合教職開発研究科
教職大学院 Newsletter 編集委員会
〒910-8507 福井市文京 3-9-1
dpdtfukui@yahoo.co.jp